

クラス会および近況だより

河野 功先生教授昇任15周年お祝い会と日本生薬学会の開催

田中 隆 (特)

平成19年12月1日に、天然物化学研究室、河野功教授の教授昇任15周年と、1年遅れとなっていました。長崎近郊にお住まいの生薬学・天然物化学研究室、薬用植物園の卒業生と在生に、河野先生の最初の博士課程学生であり、生薬学研究室助手を経てハーバード大学に留学、その後香港浸會大学中医薬学院教授としてご活躍中の姜志宏先生(博平6入)もお忙しい中、急遽来日されて会に加わってくださいました。

河野先生は昭和54年(1979年)に長崎大学に助手として赴任され、教室発足当時の高取治輔教授(大14)、その後を継がれた河野信助教授(昭17)に続いて3代目の教授に平成4年(1992年)に就任されています。

久々になつかしい顔ぶれも集まり、皆さん学生の頃とほとんど変わらない様子で、「最近の若い連中は……」といった愚痴も交えながら話題は尽き



河野先生(中央)、姜志宏先生(手前)と卒業生(H19.12.1)

ず、短いながらも楽しいひと時となりました。還暦のお祝いの品として、学生が選んだ琉球ガラスの大きな花瓶が贈られました。



また、平成20年9月19日～20日の2日間、日本生薬学会第55回年会在、河野 功先生を大会実行委員長として、長崎大学文教キャンパス内の5つ

の会場で開催されました。これまでの東京や名古屋での開催に比べて長崎の地理的不便さを危惧しましたが、結局、参加者、演題数ともに過去最多

となり、大変盛会となりました。特に演題数は昨年よりも40演題も増えており、急遽会場を1つ増やすほどでした。

直前まで襲来が予報されていた台風は、全国から集まった700名を超える生薬学会会員が吹き飛ばし、学会当日は真夏を思わせる晴れた暑い日となりました。学会は昨年よりクールビズを宣言しており、スタッフはノーネクタイの軽装でしたが、背広で来られた方々には大変な2日間となりました。特に補助体育館のポスター会場は大変な熱気で、各ポスターの前ではさらに熱い議論が戦わされていました。

ウェルシティ長崎で開催された懇親会では、学部長の畑山 範教授にあたたかいご挨拶をいただきました。また、この学会が37年前に長崎で開催された時の実行委員長であられた河野信助名誉教授も山口から駆けつけてくださり、元気なお声で乾杯の音頭を取っていただきました。心よりお礼申し上げたいと思います。

今回、裏方として参加者名簿を改めて見ると、私が初めて生薬学会に参加した頃に私の発表の座長を務めてくださった先生方が、今も名誉教授な

どとして参加されている一方で、若い学生さんの参加が明らかに増えていました。長崎観光をしてほしいという思いもありましたが、学会終了後すぐ、あるいは翌日には帰途につかれた方も多かったようで、今回の演題数の増加は、長崎が観光地であるからだけではなく、この学会の今後の発展に期待を持たせてくれるものだと感じました。また、2年生を含む学部学生の参加者がかなりいたこともうれしい材料でした。今回の学会運営は、天然物化学と薬用植物園の教官と学生に加え、他研究室の学生の皆さんにもお手伝いいただき、研究室としては初めての学会開催ではありましたが、ほぼ滞りなく終えることができました。

さて、2つの行事を中心に述べてまいりましたが、天然物化学研究室(旧生薬学研究室)には、現在社会人博士課程や留学生の方も含めて18名、今年から10月配属されるようになった3年生も含めると総勢24名が所属します。建物の大改装後数年を経て少し綺麗さもうすれかけてはおりますが、卒業生の皆様、お近くにおいでの際は是非お立ち寄り下さい。

エ ッ セ イ 3 点

服部 俊明(昭28)

青春のPASSACALIA

石畳の港街長崎で養成所4年の僕は部活で弦楽部長になった。首尾良く新入生10人を迎えたので歓迎と結束の意味で柿^{こけらおと}落しにレコードコンサートを開いた。

曲目はメンデルスゾーンとチャイコフスキーの両バイオリン協奏曲およびサラサーテ自身が弾いたストラディバリでのチゴイネルワイゼンだった。今でもその情景は鮮明に甦る。アメリカ文化センター(ABCC)から最新のオーディオと米国本場のレコードを借り出せたので、切れ味が鋭く音色は繊細だった。思わず引き込まれて鳥肌が立った。

コンサート終了後は茶話会を開き感想等話し合った。責任者の僕は最後迄残って後片付けと機器の搬出となる。数人の学生が手伝ってくれたが、

中に特に親身になって掃除も率先する膝小僧の可愛い女子学生がいた。スタイルが良くあどけない笑顔と円らかな瞳は眩しかった。知性と対話の妙はピンと言えばカンと来る。楚々とした立ち居振る舞はきっと日本舞踊でも習っていたのだろう。

何時しか二人は学外でもデートを重ねた。名所旧跡を訪ね、山登りや喫茶店でも目を輝かせて語り合った。

でも月日の流れは早く、僕は何時の間にか卒業となった。郷里のX市に帰り東京の会社に入社準備をしているところに彼女から電報が舞込んだ。電話が希少な頃。Y駅で待っていると言う。何はさて置き駆けつけ、古刹等散策しながら話し合ったが未知なる地殻変動の予兆を感じた。

「元気で東京の会社で頑張ってくださいまし」

「貴方も残る三ヶ年の学生生活を充実して下さい」といって別れたが逡巡と寂寥は万感交々到るを覚えた。

その後何回か手紙の遣り取りはあったが、彼女を無責任に束縛する権利はないと瘦せ我慢の任侠の道を選んだ。

それから何年か経って、彼女はA社に勤める同級生のE君と結婚して東京に住んでいると風の便りで知った。そんな時、転勤で広島に居た僕の会社にE君夫妻と親友だったと言うT君が転勤して来た。或る時日本生化学会が東京で開かれたのでT君と帯同して学会出席した。その時T君がE君夫妻から東京の自宅に招待されており僕にも一緒に誘われた。真相は藪の中で興味津々戸惑った。

僕とT君を彼女夫妻と小さなお子とで「先輩、先輩」と迎えてくれた。昔話と美酒に酔ったが秘かに心は揺れていた。頃を見てお世話になったと別れの挨拶を交わした。彼女は僕にオーバーを千の想いを込めて羽織わせてくれた。靴ペラも取ってくれたが其処には凜とした茶道があった。

深夜の東京の街は薄寒くコートの際を立てて帰ったがほろ苦い想いで夜風が切なく僕の胸を締め付けた。

今「蟬しぐれ」の終章の名場面「文四郎様の……」
「それが出来なかったことを生涯の悔としております」

この藤沢文学は不朽の名作で今でも通用する。人と人との心象を素朴に描いているような気がするのである。

長崎のころ『如己』

卒業後、今年で55年になる。完全な後期高齢者だ。その間前の会社に37年間勤務し、更に18年間馬齢を加えました。丁度今年で平均寿命を全うする訳だが、幸い残軀天の許す所。同窓会名簿に依れば鬼籍に移られた方が25%位に成るだろうか。

歳月と共に血管も老化して行く。何時しか紅顔の美少年は老い、懸命に働く者は疲れ、濃い心労をその体に刻んで行く。若さと幸福を奪うのが歳月なら、歳月から其れを取り戻す術は無いのか。徐福に命じて不老不死の薬を探させた秦の始皇帝の話は有名である。

今では若さを取り戻すには学業期の旧友に会い

寮歌放吟し気炎を上げるのが老化防止に良いと茂木先生も言っている。そんな訳でみちのく仙台孤児の私には負担と犠牲は大きいが極力同窓会や同級会には、たとえ東京で開かれようが大阪で開かれようが殆んど出席している。

先般佐賀へ亡母の13回忌の法事で帰郷したが、そこで足を伸ばして母校の長崎を訪ねた。しかし其処には知り合いの先生が居る訳でも学生がいる訳でもない。変貌する母校が心の故郷として懐かしいだけの話である。

意を決して同窓会館の事務局を訪ねた。そこでは専任の武次郁子女史が接遇してくれた。彼女は同窓会の現状や運営を手際良く説明してくれた。新たに設けられた記念館、研究室の一部も案内して貰った。負け惜しみを言う積りは無いが私どもの在学当事と比べたら質、量ともに隔世の感は禁じえない。研究内容も充実し、国際競争に立ち向かって居られる状況を垣間見て欣喜雀躍！

無上の敬意と声援をおくる者であります。

時恰も6月6日学部の庭は市花のアジサイが何種類も色とりどりに咲き誇っていた。そう言えば在学中高取教授からシーボルトがオタクサと名付けた話等を思い出して胸が熱くなった。是も附属の薬用植物園を管理する研究棟の成せる業か。私の滞在時間は短かったがアメニティとホスピタリティのモデルを感じた。

長崎には、長崎の鐘で有名な【如己堂】がある。私どもが学生の頃、永井 隆博士は存命で二畳一間の居宅の病床で「此の子を残して」を執筆しておられた。先生は「己の如く」の精神で、ご出身地は島根県だったが長崎をコノナク愛された神の使者その者だったと思われる。

筆者は更に外海地区の【遠藤周作記念館】を訪ね『沈黙』の源流とカトリック文学の背景に迫った。外海西彼はカトリック教会群。産業を振興されたド・ロ神父。理不尽な踏み絵については身を挺して民を守った悲しい史実。等々。なお今回は斉藤茂吉が愛した小浜温泉にも泊まり、島原半島、橘湾の海の落日と日の出も忘れ難い思い出だ。山と海と島の長崎は景観よし。食文化良し。人情良し。心豊かな持て成しの文化は人を虜にして放さない。

わが国の選挙制度の問題点

福田総理が突然辞任した。この2年足らずで安倍さんに続いて二人目である。こんな無責任な話はない。(儲けたのは太田誠一農水相)外国では有り得ない話である。此の原因は二世、三世議員が多過ぎるからである。

先般ある議員の国政報告会に出席した。その中で彼は、議会でも幅を利かす議員は当選回数が多い人と、二世、三世議員だと言う。話に依れば、先生のお父様やお爺様にはその昔大変お世話に成ったと言うのだ。

こうして二世、三世が増殖し派閥を作り、美味しいポストが自動的にたらい回しされて行く。

本来選挙はどぶ板、辻説法が基本であり、国民

の理解と支持の上に成り立つべきである。ところが親譲りの地盤、看板、カバンのある人が優先される。今の儘では政治に対する情熱と能力を持った若い人が選ばれにくい。

単に票を何万票取ったからではなく、今こそ議員立法で自主的に二世議員は得票から10%、三世議員からは20%を差し引く事を取り決めたら如何だろうか。つまり、相続した地盤の税法上の累進課税でありハンディである。

こうすれば意欲と能力のある若い政治家が出やすくなるのだ。当選した選良は国民の信託に对应して責任持って国家を洗濯して欲しい。理想社会の実現の為、緊張して命掛けて政治に取り組んで貰いたい。

同期会開催

鈴木隆之介(昭28)

大学1期の卒業生は、2～3年毎に各地区回り持で同期会を開いている。今回は名古屋が担当する筈だったが、急遽関西にと依頼があった。

宝塚温泉にて10月18日に、本来ならば9名の予定だったが、斎藤君が前日に肋骨を痛め急遽欠席した為、8名にて開催した。温泉でゆっくりした後、開宴。亡き友の冥福を祈る黙禱を捧げた後、ノーベル賞の下村先生の思い出話、学生時代の懐

かしい事など、話は尽きず2時間、更に席を変えて1時間話し込んだ末に解散した。

参加者は、永田久利、池田治昭、松尾亘順、森昭雄、山口哲郎、池上博、野田庸二郎、鈴木隆之介の8名。2年後の再会を約し、翌朝帰路に就いた。又、一ノ瀬正彦氏より同期会の為の寄付を頂きました。感謝



三朋会旅行(昭和三十年卒)のご報告

黒岩 幸雄 (昭30)

今年の三朋会は、2008年10月15日～17日まで、秋日和に恵まれた甲斐の国、石和（いさわ）温泉で開催致しました。

参加者は、山戸 寿、馬詰久子、酒井裕子、副島英夫、宮崎タツ子、郷野美智子、峯 武麿、峯京子、鋤塚紀子、田中熙子、黒岩幸雄、同夫人の計12名（男性4名、女性8名）で楽しく3日間を過ごすことが出来ました。今年の三朋会の旅行を企画するにあたりまして、昨年の北九州での素晴らしい旅行が強い印象で脳裏に残っており、関東では何処にしようかと大変迷った次第です。私達も、今年は70歳も半ばを過ぎ、いわゆる後期高齢者の仲間入りをしましたし、ここしばらくの参加者の数を見ますと、半分またはそれ以下のことが多く、年齢には逆らえない体力になってきたのかなと思ったりもしていました。今年は年齢的にも一つの節目と致しまして、日本一の富士山を見、かつ、触りに行こうということで、本会を企画した次第です。多くの仲間達が、金婚式や喜寿のお祝いに入る人達も多かったことだろうと思います。そういう訳で、甲斐の国山梨県に決定し、富士を中心とした観光を組み立て、富士山五合目までバ

スで登り、富士に触れ、素晴らしい紅葉を鑑賞し、次に富士に降った雪や雨が何百年か経過の後、こんこんと湧き出ている忍野八海を見学し、富士五湖の一つである河口湖から再び富士を眺めて、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。山梨県は盆地で気候が温暖なことから、ぶどうや桃の産地で、世界的に有名なワインの産地でもあり、帰路はワイナリーでワインを堪能して頂きました。石和温泉は終戦後発見された温泉で、現在、関東の名湯に数えられており、そこに2泊し旅の旅情を満喫して頂けたと思います。帰路は「心頭を滅却すれば火もまた涼し」で有名な恵林寺を見学し、東京では浅草浅草寺を観光し、下町気分を味わい、夕方、九州組は羽田空港に着き散会しました。NHKのドラマで「風林火山」の舞台になった甲斐の国ですので、武田信玄が戦国武将としての戦いだけではなく、笛吹川を中心とした新しい考えの治山治水の話の聞きながら、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。来年は、長崎組で計画されますので、皆で集まり語り合えることを楽しみにしております。



昭和32年卒最後のクラス会

飯島佐枝子（昭32）

小春日和に恵まれた10月21日・22日、湯布院でクラス会を開催しました。92歳になられた一番ヶ瀬先生も奥様とご一緒に参加されました。本当は卒後50年に当たる昨年が、最後のクラス会でしたが、今年も計画したところ9名が集い、歩けないとか、長時間の乗り物は辛いとか、愚痴りながらも気分は少しだけ若返って、楽しい会となりました。ただ、開催の数日前まで、出席者の数が体調の変化に左右されて、なかなか定まらなかったのも年齢のせいかなあと感じました。

今年は、下村先生のノーベル賞受賞の話題もあり話に花が咲きました。当時、先生は分析化学教室の指導員であり、時々、実習の指導でお世話になりましたが、残念な事に、自慢出来るような思い出はありません。唯、廊下で出会った時に感じる背の高さは一際印象的でした。ノーベル賞なんて失礼ながら、想像もしていなかったので、先ず吃驚し、そして誇らしい気分させて貰いました。

有難う 下村先生。お元気で、頑張って！

私達の在学当時、校舎は昭和町にあり街にも大学の校舎にも、第2次世界大戦の跡が強く残っていました。大学の敷地内で遺体が焼却されたと聞いたし、図書館に通じる暗い廊下には、幽霊が出るという噂もありました。実際に見た者はいませんが、その廊下は振り返らずに足早に通ったものでした。遠い昔の思い出です。

今回、嬉しい事がありました。宴会時に旅館の社長からワイン3本がプレゼントされ、えっ何故？と思いながらも美味しく頂戴しました。翌日は金鱗湖あたりを散策する予定でした。出発の時、玄関で社長さんにお会いし、戴いた名刺には淵上亀之助とあり、長崎経専（現経済学部）を卒業された方だとの事。長崎大学薬学部クラス会の名前で予約した私達を、懐かしく思ってくださいワインの贈り物になったようでした。

ここで又、古き良き長崎の話が暫く続き、人との出会いは、思わぬ所にあるものだと嬉しく思いました。この宿、彩岳館は、部屋からも、お風呂



2008年10月21日 於 彩岳館
中西 工藤 波多野 飯島 白石 小林
宮崎 河田 先生の奥様 一番ヶ瀬尚先生 白石

からも、由布岳が望まれるくつろぎの宿でした。

金鱗湖までの散策を終わり、最後のクラス会を例年より少し贅沢な昼食で締めくりたいと設定した和食に、皆、満足してくれた様子でした。

毎年、クラス会には別の楽しみもあります。親しい者同士でこの会の前後に、小旅行を計画するのです。今年私達は、友人3人と復元された熊本城本丸を見学し、日本で人気1、2位を争う黒川温泉を楽しんだ後、湯布院のクラス会に参加しました。10年以上も毎年続いたクラス会が終わるのは、小旅行もなくなる事だと思うと寂しい気持ち

でいっぱいです。どんな美食、絶景よりも、仲間の温もりや安堵感が嬉しいのです。

「温泉に身をゆだね、秀峰由布岳を仰ぎながら、くつろぎの時を共有しよう」と誘った最後のクラス会には、新しい出会いもあったし、旅の目的は果たせたと思っています。

私の記憶では、殆ど毎年出席され、今回、最後までつき合って下さった先生と奥様にとても感謝しています。又あの温もりや安堵感が恋しくなった時は同窓会総会で会う事にしましょう。

「36ばってん会」に出席して

藤島 一薫 (昭36)

平成20年6月7日(土)長崎市内のホテル(ベストウェスタンプレミアホテル長崎)で開催された長薬同窓会定期総会に合わせて、翌6月8日(日)に、2008年「36ばってん会」が開催されました。

集合日時：6月8日(日) 午前8時30分

集合場所：長崎駅前タクシー乗り場

出席者：浅井 高木 栗屋 黒田 白松
榎崎 武田 永田 味田 宇田恭
林田 藤島 松林 吉川 以上
男性7人 女性7人(光武さんは同窓会総会、懇親会のみ出席)

天候は曇り時々小雨、少し蒸々する暑さでしたが、一昨年雲仙でのばってん会に出席して2年ぶ

りの再会に気分も晴れました。またお互い容姿・容貌もほとんど変化なく皆さん元気の様子でほっとしました。

早速、2台の自家用車(武田車、松林車)と1台のタクシーに分乗して、長崎港入り口に平成7年12月11日に開通した「女神大橋」の戸町側へ直行しました。この橋は斜張橋としては九州一だそうで、橋の長さは1289m 海面からの高さは65m 毎年4月末頃行われている長崎帆船祭りの際、日本を代表する帆船「日本丸」等大型帆船がこの橋の下をパレードして長崎港へ入港します。この橋の長さ、高さを想像してみてください。私達は、戸町側から対岸の木鉢町方向に歩いて渡りました。



2008年6月7日 於 ベストウェスタンプレミアホテル長崎
永田 白松 光武 味田 黒田
浅井 榎崎 宇田恭 栗屋 武田



2008年6月8日 於 長崎、女神大橋
松林 吉川 白松 榎崎 高木 味田 浅井 黒田
栗屋 永田 藤島 宇田恭 林田 武田

結構な距離でしたが、海側から素晴らしい長崎港を中心に市街を一望することができました。帰日もこの橋を歩いて戸町側へ戻って来た人もいましたが、私達は車で戸町側へ戻りました。全員が駐車場に揃ったところで、長崎県立美術館まで車で移動しました。

ここからは出島ワープをぶらぶら歩きながら「出島和蘭商館跡」(出島)に立ち寄りました。ここは「長崎さるく博'06」の際に整備され、展示物や内容も以前と比べると随分充実されていました。また、小雨も降ってきたせいか場内中庭の紅色の紫陽花がとてもきれいでした。6月、雨、紫陽花が長崎にはよく似合います。「出島」の入場料について一言。老人割引があり、一人500円のところ250円でした。少し得した気分になりました。これからは色々の歴史文化／娯楽／運動施設等を利用する際、自分の年齢を証明するものを常時携帯しておく年齢になってきました。

昼食では老舗料亭「一力」(文化10年創業)で粟屋さんの歓迎挨拶の後、「姫重しっぽく」をいただ

きながら話もりあがりました。会食後、松林重宗さんのサイン入り「水彩画集」を出席者全員が購入しました。この画集は平成20年4月12日付けの長崎新聞で「郷愁にじむ水彩画、明るく透明感のある画風を楽しめる」という内容で紹介されました。私の感想ですが、非常に気持ちが安らぐ117点の立派な水彩画集です。同期生として誇りに思っています。機会がありましたら是非一度ご覧になってほしいと思います。

次の「36ばってん会」は来年10月か11月頃、唐津に決定。東京での長葉同窓会総会(平成21年6月20日)、ミニ「36ばってん会」(平成21年6月21日)及び唐津での再会を約束して一応解散としました。皆さんの帰路の時刻に合わせて、各々の「長崎さるく」となりました。私たち5人は「一力」から崇福寺下まで小雨の中を歩き、「らんらんバス」に乗車、スタート地点の長崎駅で今回の「ミニミニ長崎さるく36ばってん会」を終了しました。

最後に、今回も武田さんには大変お世話になり感謝いたします。

平成20年同期会

平 季久(昭37)

今年同期会は、11月9日、10日、私共幹事3人が在住する大分県中津市で催され、2日目に国東半島巡りが貸切りバスで行われた(男性16人、女性2人)。

これに先立ち、10月7日のノーベル物理学賞受賞(3人)に続き、10月8日下村 脩先生のノーベル化学賞受賞の報道がなされ、我々同期会の間でも喜びのメール、電話が飛び交った。更に、11月3日秋の叙勲で古川 淳先生が瑞宝中綬賞の荣誉に輝き、心からお喜びの言葉を申し上げると共に、同期会を盛り上げてくれる事を期待して本会に臨んだ。

9日、曇、午後3時中津駅に集まり、17人連れ立って福沢諭吉旧居、同記念館に徒歩で向かう。寺町通りは日曜日の午後らしく静かで、語らいながらの散策は楽しかった。お寺がこんなに多かったかと今更ながら思う。合元寺(赤壁寺)は別名

のとおり壁が赤く塗られている。これは、城井城主宇都宮鎮房が、和睦を装った黒田如水の裏切りにより中津城で討たれたとき、合元寺に籠もっていたその家臣達も討ち死にし、壁についた返り血が幾度塗り返しても浮き出してくる為、赤く塗ったと言われています。

30分弱で福沢旧居につき、簡素な藁葺き家をバックに写真をとる。諭吉は1853年大坂の中津藩蔵屋敷で福沢百助の次男として生まれ、1歳半の時父と死別し、母子6人で中津に帰郷、19歳の時、蘭学を志し長崎に遊学するまで、この家で過し勉学に励んだという。この庭の隣にある福沢諭吉記念館でビデオ、展示物などで明治維新の先覚者の足跡をたどる。

次に、歩いて7、8分のところにある中津城に向かう。この城は黒田如水が豊臣秀吉の命により、九州を平定し16万石を拝領して1588年山国川河口、

周防灘に臨むこの地に建てた、海水の出入りする水城であります。約半数の人はお城の上階まで上り、対岸の吉富町、豊前地区（福岡県）、中津市街、県境の山国川などを遠望した。皆さんの中津についての感想は、山が遠いこと、坂が少なく、平地である事などであった。午後5時を過ぎ、少し暗くなり帰路につく。嘗てのアーケード繁華街（今はシャッター通り）を歩いてホテルに戻る。

午後6時30分、夜の宴会となる。集合写真は吉田君にお願いし、野内幹事の司会で始まり、8月に亡くなった相川氏への黙禱、ご冥福を祈る。次に、米国から10年余ぶりの参加となる本田君の乾杯の音頭で宴は始まった。

今回は、司会の発案で近況報告は、久しぶりの出席者及び希望者に限られた。やはり、最初の報告者は米国ミズリー州カンザスシティから出席の本田君になった。彼は在職中米国駐在の経験があり、定年後移住した。元気で、いまだ若々しい。彼から「ラスベガス」での本会開催の提案があり、「いいなあ！」の声が多かったが、この場では具体化の話は進まなかった。また、彼の米国での生活の一部がパソコンスライドで紹介され、豪邸、アヒルの群れが泳ぐ池付きの広々とした庭、子供たち家族との同居、さすが住環境に恵まれた米国を感じた。

次に坂田君、専門学校講師として活躍が過ぎてか、ひと頃少し体調が悪かった様だが、元気な姿を拝見しひと安心。来年の「唐津」での福島幹事のサポートなど約束され元気そうであった。

また、今回は女性の参加は2人と少なく、今後

参加を促すような話も出た。女性の皆さん、宜しくお願い致します。男性軍、淋しそう。

さらに、今回の欠席者の近況報告が平、築貫幹事からそれぞれ紹介された。親の入院の為、孫のお守り、甥の結婚式、腰痛、病気療養中、奥様の体調不良、ドラッグストアで勤務中、新設の薬科大学で文部科学省の監査の為等々であった。

ところで、本会の料理は中津名産の「はも」懐石でした。また、池田君の差し入れの鹿児島名産の焼酎、美味しく頂きました。感謝！ 二次会は同ホテルの別の部屋でお喋りを続け、午後10時「長崎の鐘」を皆で歌いお開きとしました。

2日目、10日、天気は曇、14人でのマイクロバスによる国東巡りである。9時前出発、訪問先は国宝「富貴寺」→「真木大堂」→国宝「宇佐神宮」である。途中、宇佐市にある第35代横綱双葉山(69連勝で有名)の生家に立ち寄る。記念館の奥の小さな「麦わら葺きの家」がそうである。折りしも菊花展示で華やかで、観光客も多く、今なお彼の人気を感じた。次は、同じ宇佐市に嘗ての「宇佐海軍航空隊神風特別攻撃隊」の掩体壕^{えんたいごう}一軍用機を空襲から守るための格納庫跡一がある。特攻隊の犠牲者石碑から200人弱の若き命が失われた様である。この事は忘れてはならない

やがて、バスは「富貴寺」に着く。この寺の屋根の曲線は美しい。紅葉が今一だったのが物足りない。国宝・大堂は西国唯一の阿弥陀堂であり、九州最古の和洋建築物だそうである。内陣中央には本尊阿弥陀如来坐像（重文）が安置され、堂内の壁画（重文）は平安三壁画の一つと言うことで



平成20年11月9日 於 グランプラザ中津

ある。

団子汁の昼食後、つぎの「真木大堂」へ向かう。最近修復作業を終え、11月1日から再展示されている。白牛にまたがる3対の手、足、顔をもつ仏様「大威徳明王」、中央の「阿弥陀如来」、背後に勇壮な火炎を背負う「不動明王」、いずれも藤原時代の作といわれる。

次は、最後の「宇佐神宮」に向かう。全国4万社余りの八幡様の総本宮。広大な境内、こんもりと茂った大木の下への参道を登って、国宝に指定さ

れている八幡造りの本殿にたどり着く。本殿は橙色で鮮やかである。各人、それぞれの願いをこめてお参りをしていた様である。この神宮は欽明天皇により（571年）、建てられたという事である。

観光の予定を終え、一路、バスは中津駅を目指し、来年の「唐津」での再会を約して午後3時解散となった。皆さん本当に疲れたことでしょう。同期生と久しぶりに語りあえ、楽しいひと時でした。また、本会の写真班を勤めて貰った吉田、野村君に感謝いたします。（幹事：築貫、野内、平）

昭和38年卒 卒後45年同窓会

青木 郁（昭38）

早くも卒後45年、40名卒業（現在37名）のうち何人が参加できるのか？とても不安でした。平成18年山陰大山で行われた同窓会において、平成20年の卒後45年の同窓会は福岡に決りました。福岡在住の昭和38年卒の中心は古賀利枝さんでありましたが、誠に残念なことに2年前に亡くなられました。福岡で行う行事は全て彼女に負ぶさっていましたので、何をどうするのか大きな戸惑いがありました。井口、大坪、柴田（旧姓豊原）、青木の4名で本格的に取り組み始めたのが平成19年秋の頃からです。毎月1～2回集まり、井口君を中心にまず開催日、宿泊場所、観光コースを決定、その後案内方法、会費等を検討いたしました。会合には時々古川先生にもご参加いただき、何かとアドバイスをいただきました。

開催日は平成20年10月24日（金）、25日（土）集合並びに宿泊場所は「JAL シーホークホテル福岡」、観光は太宰府天満宮、九州国立博物館、柳川川下りと決定。平成20年1月に同窓生全員（37名）に案内し、34名から返事がありました。出席は22名（観光17名）となりました。

第一日目は16：00集合、会食までの時間はホテル自慢の岩風呂、ホテル28階から素晴らしい福岡の眺望を楽しんでいただきました。18：00からの宴会会食は参加者全員が現況、思い出話等大変盛り上がり、下村先生がノーベル賞を受賞されたことは全員の最も誇らしい話題でした。最後は全員

で九州生まれの炭坑節を踊り（仲居さんは少し呆れ顔でした）、会場を変え二次会に移りました。

二次会での話題の中心は今回の開催時期・場所・開催方法でした。5年後の50周年はあまりに時間が空きすぎる為、2年後の平成22年は長崎で開催することとなりました。しかし現役を卒業したり、薬局を経営していたりで企画運営に関わる幹事の負担が大きいことがあり、開催方法については時間をかけて検討しました。その結果、集合日時と場所を長崎の幹事に決めて頂き、宿泊、集合方法は各人が手配する方法で開催することとなりました。

二日目は8：00ホテルを出発、太宰府天満宮を参拝後、九州国立博物館（国宝天神様展）見学後秋の筑後路を柳川へ向け一路南下、北原白秋ゆかりの水月より乗船し、1時間30分の川下りを楽しみました。お天気にも恵まれ、船頭さんの歌う柳川小唄と風景に酔いながら、すれ違う白無垢姿の花嫁にお祝いの言葉を掛けたりする機会にも恵まれました。お腹も程よくすいたころ、舟は昼食処の若松屋に到着。うなぎのせいろ蒸しに舌鼓をうち、立花候ゆかりの「お花」で買い物を楽しみ15：00帰路に着きました。卒後45年もたつと参加者の年齢は「古希」を過ぎた人、迎えた人、間もなくの人達ですが参加者の全員が元気で生き生きとした様子でした。これからも大いに人生を楽しみ、生きがいを持って過ごすことが大切なテーマです。



大坪君の肝いりでサミュエルウルマンの詩「青春」の原文と訳、そして古希に因んだ「沙 孟海」の詩をお土産に2年後元気で再会できることを誓いそれぞれの家路に着きました。懐かしく楽しい2日間でした。

「再び青春」

- ・百歳は古来稀なり
- ・九十は奇とするに足る無し
- ・八十は大いに為すべし
- ・七十は得ること多し

沙 孟海

2年9ヵ月振りのクラス会

江藤 好信 (昭40)

2005年8月の岐阜長良川の鶺鴒と花火でのクラス会より2年9ヵ月振りにクラス会を行いました。

今年のゴールデンウィークの後半は非常に暑い日が多く30°Cを越える日もありましたが、5月9日から急に涼しくなり3月上旬の気温で雨模様になりました。この悪天候の中、昭和40年卒のクラス会を山口県在住の今木君、山口君、滝田さんと大分県の黒川君のお世話で、山口県大島郡周防大島町の「周防大島温泉ホテル大観荘」で5月10日、11日に開催いたしました。10日の寒い気温と激しい雨の中、男性8名女性14名の22名が集まりました。

江藤の旅程

5月10日 新大阪駅12:24発のひかりレールス

ターで出発。広島駅で一瀬、松田両君と遭遇、山陽本線快速で大島駅へ。大島駅で九州地区の女性群と合流し、ホテルの送迎用の車でホテルへ。先着の今木君、黒川君、武良君、山口君に挨拶。

宴会前に男性の一部は入浴。作詞家星野哲郎氏(周防大島町出身)に名付けていただいた「えん歌風呂」でゆったり。露天風呂は風雨が強くすぐに退散。

18時より大宴会。瀬戸内海産の鮮魚をはじめ種々の料理に舌鼓。近況報告。

多くの人が仕事量は減らしているものの働いているようでした。

次回のクラス会は3年後では遅いので、関東地区で大田君を中心に設営することに決まる。なる



2008年5月10日 於 ホテル大観荘

べく多くの方が参加してくれることを祈りつつ。その後部屋に戻って懇談。美人のコンパニオン(山口君の奥様)の接待を受け全員脱帽感謝!

5月11日は別行動になる人もありましたが、雨も止み岩国までホテルの車で行き、錦帯橋を渡り、ロープウェイで岩国城へ。その後、岩国国際観光ホテルで昼食(郷土料理岩国寿司)を食べ解散(JR新岩国, JR岩国)。

楽しい二日間でした。幹事の皆様ありがとうございました。次回は関東でお会いしましょう。

参加者(旧姓) 敬称略

一瀬, 今木, 松永(岩), 江藤, 大田, 堀江(金子), 黒川, 山田(佐々木), 西村(滝田), 田口(津戸), 磯野(坪内), 中村, 山脇(那須), 浜田(平井), 佐藤(広木), 山縣(藤原), 松田, 藤原(松村), 武良, 山口, 近藤(山崎), 行本(鷺田)

大橋 裕先生と薬用植物栽培

富永 義則(昭44)

はじめに

生薬学の全国大会である日本生薬学会第55回大会が平成20年9月19~20日に長崎で開催された。同時に薬用植物栽培研究会発足33周年の祝賀会も開催された。この研究会はセンブリ研究会として昭和30年に発足し、上記のような研究会に名称を変えて今日まで引き継がれている。大橋先生(昭29)は、この会を10年間努められた小林正夫元東京都薬用植物園長からの後をうけ、その後20年間薬用植物に関する調査・研究報告を中心に編集・発行された雑誌「薬用植物研究」¹⁾の発行を継続発展させ会誌を格上げするなど薬用植物の栽培研究の発展に尽力された。昭和47年から平成4年の退職まで約20年間長崎大学附属薬用植物園の園長として教育研究に、またその管理運営に心血を注が

れた。²⁾同園の軌跡を辿り大橋先生の業績を掘り起こしてみたい。先生の御功績を称えるとともに薬用植物栽培の研究がより発展する様に真に願ひこの一文を霊前に捧げるものです。

長崎大学薬学部薬草園の歩み

長崎大学薬学部は、明治23年の第五高等中学校医学部薬学科の設置に始まる。³⁾⁻⁵⁾この時の所在地は小島郷佐古校舎(現在の長崎市西小島町, 長崎市立佐古小学校)と浦上里郷附属施療病院(後の長崎県立病院)で、ここで講義・実習が行われている。この時の講義録によれば、薬草関係の科目として薬用植物学と生薬学があり、それに伴う実習が行われた。しかしこの時に薬用植物園の付設があったかは定かでない。実習は近くの江戸時

代から続いていた西山御薬園を利用していたのかもしれない。薬草園の設置の記録は、上記の第五高等学校医学部薬学科から第五高等学校医学専門学校、さらに長崎医科大学校附属薬学専門部となった時である。この時の校舎の図面の中に薬草園の文字が見られる。現在の医学部にこの薬草園跡の丸いレンガ作りの花壇がある。大正14年には15坪(45㎡)の温室を備えた広さ約1000坪(3300㎡)の薬草園があったと記録されている。これが長崎大学薬学部附属薬草園の始まりと思われる。しかしながら昭和20年8月9日の原子爆弾によって壊滅的な被害を受けることになる。この時、校舎はもとより薬草園も瞬時に無くなったと聞いている。この時に長崎医科大学校の校門の門柱には長崎医科大学校附属薬学専門部の表札とともに、爆風で斜に傾いたまま、人類史上最悪の結果をもたらした原爆の悲惨さを伝える証として残されている。その後薬学部は佐賀市や諫早市に仮住まいをしながら昭和26年(1951年)に長崎市昭和町(現在の長崎大学附属小学校)に移転し、医学部薬学専門部の第28回生の卒業を最後に長崎大学薬学部へと発展し、本格的な薬学の学術研究・教育が始まる。この最後の専門部の卒業生の中に、平成20年10月8日にノーベル化学賞の受賞が決まった下村 脩先生がおられる。

長崎大学薬学部が昭和町でスタートした時には研究室は13講座になり、この時薬用植物の教育・研究の重要な施設である薬草園も中規模の温室が併設された。この時から大橋先生の薬用植物の栽培研究がスタートすることになる。昭和29年に薬学部を卒業され、昭和35年(1960年)には生薬学研究室の助手とされている。この時の生薬学教授が「彩色写生図日本の薬用植物」⁶⁾の著者でもある高取治輔教授であった。

昭和44年(1969年)5月には薬学部の新校舎とともに薬草園も現在の長崎大学の文教キャンパスに移転することになる。しかしながら、大橋先生のこの時の将来構想からすると、薬学部の占有敷地は狭く薬学部の教育・研究にとって十分機能していない薬草園だったのであろう。文教キャンパスの校内薬用植物園の充実とともに「野母薬用植物園」と「島原薬用植物園」の設置計画が実行されて行くことになる。現在では大学の再編・統合の

結果、医学、歯学、それに薬学の3学部が統合し、大学院主体の長崎大学医歯薬学総合研究科になった。薬草園も附属薬用植物園となり、日本の中でも有数の薬草園とするため心血を注がれ企画された全国に名立たる設備も、法人化後まもなく平成20年には、実動しているのは文教キャンパスのみとなり、大橋先生の壮大な薬草園の夢は敢え無く消え去ってしまった。しかしその意思はここに伝えておかなければならない。

長崎大学薬学部附属薬用植物園⁷⁾

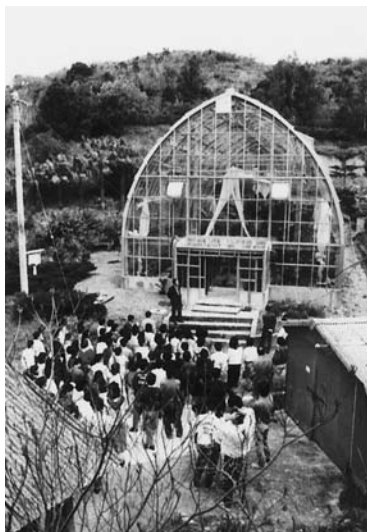
1) 野母薬用植物園

この植物園(15,416㎡)は、最近長崎市に合併統合された長崎市野母崎町野母字コケラに昭和43年(1968年)3月に設置された。しかし大橋先生が退官される頃は大学改革の波に飲み込まれて行くことになる。平成20年(2008年)に医歯薬学総合研究科が管理運営を放棄するまで薬草園として続いた。ここに平成7年(1995年)に発行された「長崎大学附属薬用植物園要覧」がある。そこから一部は引用させてもらう。

この薬用植物園はこれまでの大学の附属植物園にはほとんど例のない無霜地帯に位地し、亜熱帯系の薬用植物園として活用されることを目的としていた。この薬草園の近くには亜熱帯植物の教育や研究施設、さらには観光として魅力溢れる長崎県立亜熱帯植物園がある。そこの共同歩調がとれば新たな形の薬草園になったであろう、大橋先生がこの地に薬草園を企画されたのも本意はここにあるかもしれない。又最近では近くには水仙の里があり、温泉が開発され、憩いの里(健康村)となっている。薬草園は設立以来年々充実してい



野母薬用植物園開園当時の全景(1968年)



大型温室前での説明風景

き大型温室（高さ8m、面積180㎡）、中型や小型の温室、さらにはパイロンハウスも整備され、その規模は大学薬用植物園としては国内有数の施設となり、研究および教育標本用薬用植物が植栽されていた。さらに

1975年には研究棟も完成し学生実習が本格的にスタートした。また学生や教職員10人近くが食事付きで宿泊できるようになっていた。学生数人と徹夜で色々語らったのが忘れられない思い出となっている。

2) 島原薬用植物園

野母の薬用植物園の整備が進み、元島原藩の薬草園跡に近い長崎県島原市に新たな薬草園が計画された。この島原薬用植物園の開園（昭和51年3月1976年）は、同地に九州地区国立大学共同研修センターを開設（昭和51年4月、1976年）したのとほぼ同時期であった。この場所は海拔300~400mの高冷地に位置し、この特徴を活かして温帯系寒冷地型の薬用植物栽培の研究および教育が行われることを目的としていた。上記の野母薬草園および文教キャンパスの校内薬草園との比較栽培や活用も行われていた。前の共同研修センター利用者も見学可能なように常時開園していた。この地域の農家に薬用植物の栽培法を伝授し、農家の安定した収入に幾らかでも貢献できればとの思いもあり、地域に解放された薬草園として考えられていた。さらに先程記した元島原薬草園との関係で薬草や薬草園の歴史も学べるようにと、大橋先生は考えられていたに違いない。それが平成2年11月17日（1990年）、の雲仙岳の噴火による火山灰や火災流のため、この地域は危険区域となり立ち入り不能となって、現在に至っている。今は火山の



島原薬用植物園と九州地区国立大学共同研修センター全景（1976年）

影響も無さそうだが一向に手が加えられる様子もない。財政的に、人的に運営の余裕もない。

3) 文教キャンパス校内薬草園

長崎大学薬学部が昭和町から長崎大学本部のある文教町に移転すると同時に、薬草園も薬学部へ併設して開園（1969年5月）された。その後昭和58年（1983年）鉄骨二階建（教員・学生実験室、学生セミナー室、恒温室、管理事務室等）の研究棟が完成した。この園は面積2,016㎡で、植物の研究栽培および学生実習用材料の供給に使用され、野母や島原の薬草園との対比で、主に温帯系暖地型の薬用植物の栽培に活用された。

ここに三カ所で総面積31,336㎡の長崎大学薬学部附属薬草園が完成した。

4) 管理運営

昭和47年（1972年）4月に助手定員が認められ、この薬草園が正式に長崎大学薬学部の附属施設として承認され、園長が発令された。昭和52年（1977年）には教員2名（助教授1名、助手1名）、技官3名（1名は校内、2名は野母薬草園配置）で運営されるなど、薬草園の運営形態が最も充実していた時である。この後は日本全体を巻き込んだ行政改革の波に飲み込まれて行くことになる。平成5年（1993年）に1名、翌年にも1名、さらには平成8年には助手の定員も無くなっていった。最後には野母薬草園の放棄となった。薬学部・薬科大学には薬草園を設置することは設置基準で義務付けられている。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属薬用植物園（薬学部ホームページより）

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属薬用植物園は、長崎大学文教キャンパス内に設置されている。裏門に隣接する場所の条件と、学内の学生・教職員をはじめ、市民の方々にも公開されている施設であることから、多くの方々が四季折々の薬用植物に接することができる身近な施設として親しまれている。同園は、2,016㎡の面積を有し、この内440㎡は研究・管理棟（教員・学生実験研究室、研究セミナー室、恒温室、理化学測定室、生薬乾燥・種子保存・標本室、土壌調製室、ガラス室、管理事務室など）として教育研究並びに施設の維持管理に利用されている。また、園内は、標本園、栽培研究圃場に区画され、457種の植物が植栽されている。

一方、平成12年（2000年）2月に同園内に設置されたシーボルト記念植物園には、シーボルトが日本からオランダへ持ち帰ったとされる約500種の植物のうち、現在でもライデン大学附属植物園で継続的に栽培されている13種15本の植物の中から、ケヤキ、フジ、アケビ、ツタ、イロハモミジの計5種が、長崎大学・ライデン大学国際学術交流の記念としてライデン大学附属植物園から株分けされ、百数十年の年月を隔て、日本に里帰りし、本園内の一画に根を下ろし、再び息づいている。

薬草園の現状と必要性

薬草が漢方薬や生薬の資源として病気治療にとって欠かすことのできないのは周知の事実である。生物資源の枯渇は世界規模で進んでいる。食の安全が危惧されている現在、自然食品の人気の高まりは単なるブームではないような気がする。これまで日本の漢方薬はほとんどを外国に、特に中国に頼っている。その中国は麻黄は甘草の輸出を制限している。ほとんどの国が自国に自生する薬草の保護に乗り出している中、我が国の薬用植物栽培の現状は、薬学部に教育用の薬草園は設置が義務付けられているとはいえ、将来に希望を与える行政や文科省の政策ではないような気がする。

世界中で薬用植物の確保戦術が展開されるであろう、既にヨーロッパやアメリカでは世界の植物の資源獲得競争が始まっている。17世紀から20世

紀中期にかけてヨーロッパに現われたプラントハンターによって世界各地から食料、香辛料、薬用植物等や園芸品種まであらゆる種類の植物採取のターゲットになった。この時代、日本もその草狩り場になって行く。江戸時代の宮崎安貞の「農業全書」⁸⁾や小石川薬園が時代ともに充実して行き、薬草の生産栽培が行われる等薬草の栽培技術がかなり高度であったことが伺えるが、全国的な資源の確保というところまではいっていない。江戸時代にはオランダの三学者といわれるケンペル、ツウンベリー、シーボルトが日本の植物の分類を行っている。⁹⁾特に、シーボルトは出島で植物の栽培研究を行い、500種ほどの植物標本をヨーロッパに持ち帰り、そのうち13種程は今でもオランダのライデン大学で栽培されているという。その中でヨーロッパで冬に咲く赤いバラとして有名な椿があり、また世界中で取り引きされている百合の花もその原種は長崎のカノコユリである。¹⁰⁾日本に薬草が持ち込まれて栽培に成功した例は詳しくは知らないが、人参、いわゆる徳川幕府が専売とした「お種人参」の栽培例はある。この頃から幕府をはじめ各藩が競って薬草園の造園に乗り出すことになる。¹¹⁾いまでもその薬草園が引き継がれているところがある。長崎にも、今は単なる史跡となっている幕府直轄の「西山御薬園」があった。これらの植物園では、当然中国からの薬草も栽培されていたであろう。今、日本は、世界中でバイオバイラシー（生物資源の盗賊行為）があらわれる程プラントハンターが活動している時代であることを、認識すべきではなかろうか。薬用植物の遺伝子資源として、また生物全般における生物多様性を保全する知恵が必要である。人間はこの世に誕生した時から自然の中の一員として、自然とともに時間を掛けて進化してきたが、今日の環境悪化のスピードは生物の進化を遥かに超えている。その原因は人間が作ってきた。生物それぞれの種にとって絶滅危惧種といわれることのない自然環境保全が非常に重要で、そのことが結局は人間のためにもなる。これほど周りに人工物が溢れると人間にとってはもちろん、他の生物にとっても違和感があり、それぞれの生物がかつて独自に進化を始め、生物の異常な進化となって人間にも降り掛かり、人間のアレルギー等のように様々な疾患と

なって現われている。人間は自然の中の生き物であり、薬草もそれぞれの役割をもって存在し、その一部を人間にも利用させてもらっている。このことを認識する必要がある。

薬用植物が、有史以来漢方薬や生薬の資源として病気治療にとって欠かすことのできないのは今も変わらない。¹²⁾ 需要の拡大と自然環境の悪化から世界規模で進んでいる資源の枯渇問題解決は、薬用植物研究の分野でも重要な課題となっている。自然薬品としてその必要性は増すばかりである。速効性、劇的治癒性等から西洋薬品が重要な役割を果たしてきたのも事実であるが、病気、病人が減った訳ではなく、人間の寿命が延びるとともに病に苦しむ人は確実に増えている。昭和30年代の頃は、医療の分野でも最先端の科学によって新薬や医療技術も進み、その時に難病といわれていた疾患も解決できるだろうとの夢が幾らかでもあった。しかし今はどうだろう。病気に罹る不安の方が診療で治る希望より大きいのではないだろうか。鳥インフルエンザが何時人間を襲ってくるかの不安、温暖化を始めとする不気味な自然災害の頻発、人間の心の不安定からくる事件、人的災害など、挙げれば切りがない。一部の菌による疾患は別として、ほとんどの場合益々強力になる菌力を押さえることはできなくなり、人間の生物的生命力が脅かされることになっている。科学の進歩で病気の発見もその治療も飛躍的に進歩してきている様に見えるが、果たしてそうだろうか。強い抗菌力をもつ医薬品を開発すれば、かならずそれに抵抗力を持つ菌が生まれてくる。人間が菌力を強めている。人間自身は抗菌剤で周辺を過剰と思える程保護しているため、生物としての抵抗力をつける術を獲得しないまま自然に野晒しとなり、他の生物との共存共進が不可能になっている。自然界生物総合の互惠関係を人間だけの都合にしてきた。地球規模で進む環境変化は、人間社会ばかりでなく、動植物や微生物にも及び、微生物はその生存圏を広げ、植物もその北限をより北にしている。このような地球環境の中、特定の微生物や植物、それに動物と人間だけが得をするのではなく全ての生物がバランス良く、進化のスピードを合わせる共生が何よりも必要ではなからうか。人間の食料も自然の環境に合った植物を、必要なだけ栽培

すること、それが可能ならそうする方が良い。微生物や植物、動物を人間が故意に動かせば、そこで新たな競争が始まる。最後は人間が疲れ切ってしまう。人間が植物にも動物にももう少し優しい目を向けることで万事うまくいくのではなからうか。人間も動物も薬用植物に助けてもらっているように、人間が生物の生存環境を最適にすることが地球規模の持続可能な社会にするための必須条件となる。これが財達長崎大学環境科学部の基本理念としている。「人間と環境の調和的共生」に表現されている。

人間にとっての薬用植物が何百何千種類あるかは知らないが、日本だけでもその薬用に供されている生薬は日本薬局方によると200種以上になる。¹³⁾ その大半が外国産といわれている。甘草等はその生産地の大半が中国で、中国は既に国策として甘草の輸出を禁じている。このようにその国で生産される薬草は、その国で使用されるよう精一杯に保護される。その生産を野生品種のみに頼り栽培力を育てなければ自然と枯渇して行く。植性から現地での栽培が望ましいであろうが、新しい栽培技術を持っている日本が、その中心になれば色々な栽培上の問題も解決できるかもしれない。そういう国際協力を是非にも実現してほしい。他の国と比べて薬用資源はないが、その栽培技術も、またその自然環境もあるだろう。日本がその栽培方法に貢献することが先進国としての役割でもある。

全国の薬草園、特に薬学部・薬草園の役割は大きい。薬学部の教育に必要な植物の栽培・収穫および研究を行い、またその地域の住民に対しての生涯教育や薬剤師への卒業教育の場としてもその必要性が拡大している。現在では、広範な知識と倫理観が要求される漢方薬・生薬の認定薬剤師の養成が急務と言われる中、漢方や生薬の専門薬剤師の研修の場としても重要な薬草園として捉えられている。しかしながら大学の薬草園は、その法人化に伴い薬草の生産・研究よりも論文生産を第一とする競争原理の導入となって、実質縮小されて行くことになる。

薬用植物栽培の重要性は、薬用植物研究者による「西表宣言」¹⁴⁾によく表されている。これらを纏

められた研究者に敬意を表しその要旨をここに再度掲載しておく。

1. 内外の薬用植物の保存と保全（生育環境の保持と保存，薬草園での栄養体の保存栽培と種子の保存，遺伝子技術を用いる植物の保存，薬用植物成分の科学的解明）
2. 薬用植物の栽培の重要性（野生薬用植物の栽培化，実用栽培法の確立，篤農家の発掘と指導）
3. 薬用植物の正しい知識の普及
 - ①身近いかな薬用植物
 - ②漢方薬に用いる薬用植物
 - ③世界各国の伝統薬，ハーブ及び香辛料植物
 - ④麻薬・覚醒剤・向精神作用のある植物
 - ⑤安易に利用拡大が図られた薬用植物
 - ⑥有効成分と薬効・薬理，毒性成分とその作用
 - ⑦情報ネットを用いた知識の普及
 - ⑧薬用植物観察会の開催
4. 薬用植物の同定及び生薬鑑定・鑑識技術の向上
5. 薬用植物の情報提供に関わる指導者の育成（薬学教育の中での育成，生涯学習の場の提供，薬局薬剤師への情報の提供，植物的知識の指導する機会の企画化，マスメディアへの正確な情報の提供）
6. 薬用植物の探索・導入とそれに関わる国際的な倫理・規制に関する情報の収集と交換
7. 薬用植物に関する研究の推進と産官学研究者の協力体制の確立

大学薬草園の改革（長崎大学の場合）

1990年代から始まった行財政改革は，1998年に出された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」が提案され，実施されて行くことになる。この間小渕内閣による国家公務員の25%削減，さらに小泉内閣の郵政改革に繋がって行く。小泉内閣の「聖域なき構造改革」に踊らされ，その結果あらゆる面で格差が生じ，世の中の不安定さの要因の一つになっている。この時の遠山文部科学大臣による「遠山プラン」なるものが提案され，それぞれの大学が競って改革案を提出するようになった。私自身もこの時，長崎大学の機器分析センターに所属しており，何回かの機器分析センター関係の全国会議に出席した経験が

ある。この時文科省からの改革再編を進められ「トップ30」になればそれなりの見返りがあるような表現で具体的な金額まで提示されて改革が促された。翌年の会議ではほとんどのセンターで再編・統合が行なわれた。大学も生き残りに掛けて必死だった。しかし実際は呼称を変えただけの改革に終わったような気がする。遠山プランで提案されたのは，次の3点であった。

- ① 国立大学の再編・統合を進め，スクラップ・アンド・ビルドで大学を活性化する。
- ② 国立大学に民間の発想の経営手法を導入する。
- ③ 大学全体に第三者評価による競争原理を導入し，各分野の「トップ30」を世界最高水準に育成する。

上記のように，大学は明らかに科学技術政策および産業政策の一環として位置付けられて行くことになる。

再編・統合の嵐は，否応なく有無を言わせず全国の大学に吹き荒れた。現在の大学は「遠山プラン」に見られるように国立大学の法人化によって競争的環境にし，国の赤字財政を意識した行政改革の一環だったのである。法人化と同時に有無を言わせない予算削減が始まった。一旦，技術立国をめざす資源のない日本は技術立国の道以外はないとして，大学院大学へと移行し，施設の拡充が図られ，学生数も増えた。しかし，今は大学院生の定員オーバーが厳しくチェックされるようになってきた。一貫性に欠く政策に翻弄されているのが大学，特に地方大学ではなかろうか。最初この改革で影響を受けたのが弱小部局，特に薬草園だった。まず技官の定員削減となって現れてきた。今の大学運営には欠かせない「運営交付金」は毎年1%の減になって行く。さらに2007年には，研究成果等による「競争的経費化」案が出てきている。薬草園は大学の法人化に伴い薬草の栽培生産よりも，論文の生産が求められて，それぞれの大学改革の犠牲になっていった。まず薬草園の技官の縮小から始まり，次いで教員の定員削減へと進んで行った。もっとも充実していた時の教職員数6名が，今では園長を含め教員2人に技官1人となった。薬用植物研究，特に，薬用植物の栽培研究等は短期間で成果が得られるものではない。薬用植物の生産方法ではなく，論文の生産に追われ

ている現状の打開を急がねばならない。

おわりに

地方の大学が、地域に受け入れられ、信頼され、期待される大学になるためにも大学自身が、大学の自主的な教育・研究活動に専念できる環境にすることが最も重要ではなかろうか。競争的資金獲得に逐われ、獲得し易い研究にながされる研究がどれ程社会というか、人のためになるのだろうか。そのような研究の下ではどんな教育ができるのだろうか。大学の薬草園の役割は、これまでの教育や研究用の標本栽培だけに止まらず、大学全体の植物栽培や生態観測等の教育に活用して行くようにしなければならない。薬学の学生は少なからず薬草に触れる機会はあるが、一般の大学生は都会育ちが多いのか、塾通いで忙しかったのか、自然に触れる経験に乏しいため、自然の生物に関心が薄いようにみえる。人間は心理的にも環境の緑色に癒されるようにできている。緑に囲まれての歴史が遥かに永いものだから当然ではある。大学に緑に囲まれた癒しの空間として薬草園があってもよいのではと思う。コンクリートの林では心豊かな学生生活は難しい。薬用植物が人々を助ける薬として期待される度合いは、これから今以上に大きくなっていく。長崎大学の薬用植物園が市民に解放され、市民参加型の自然を、薬草を学ぶ場となり、今度は市民が薬草園維持発展に協力してくれる、そのような地域の住民と大学関係者が一体となった薬草園になって欲しい。

注および引用文献

- 1) 薬用植物栽培研究会, 年2回発行, 現在の最新号(30巻1号, 2008, 6)。
- 2) 薬用植物運営委員会, 「長崎大学薬学部, 附属薬用植物園要覧」, 長崎大学薬学部, 昭和47年(1972)。
- 3) 長崎大学薬学部百年史記念誌委員会, 「長崎大学薬学部百年史」, 平成2年(1990)。
- 4) 長崎県薬剤師会編, 「長崎薬史」, 昭和53年(1978)。
- 5) 長崎大学薬学部編, 「出島のくすり」, 九州大学出版会, 2000。
- 6) 高取治輔, 「彩色写生図日本の薬用植物」, 昭和55年(1980)。
- 7) 池永敏彦, 北村美江, 「長崎大学薬学部, 附属薬用植物園要覧」, 長崎大学薬学部, 平成7年(1995)。
- 8) 宮崎安貞, 「農業全書」, 元禄8年(1669)。
- 9) 中西 啓, 「長崎のオランダ医たち」, 岩波書店, 1993。
- 10) 大場秀章, 「花の男シーボルト」, 文藝春秋, 平成13年(2001)。
- 11) 上田三平, 「日本薬園史の研究」, 昭和6年(1931)。
- 12) 清水藤太郎, 「日本薬学史」, 南山堂, 昭和24年(1949)。
- 13) 第十五改正日本薬局方(平成18年3月31日厚生労働省告示)。
- 14) 日本薬剤師研修センター, 漢方薬・生薬 薬剤師講座テキスト1, p-21, 「西表宣言」, 2000。

最近の教育事情 大学・短大のあり方

和泉 喬(昭45)

この原稿を頼まれたのは、わが薬学部の大先輩に当たる下村 脩氏(昭26)がノーベル賞受賞に決まった2, 3日後であったと記憶している。氏の略歴をニュースで見ている、なんと長崎大学薬学部出身と知ってびっくりしたものである。翌日わが職場(某短期大学)でも、若い講師が朝から部

屋にやってきて、えらく興奮していたことと、なんとなく尊敬のまなざしであったことを思い出す。失礼ながら、下村氏についてはまったく知識がなく、どうやら私が長大に入学した頃は、すでに名古屋大学へ、さらには米国へその研究拠点を移した後であったようである。

その後の中島憲一郎教授（昭46）による下村氏の業績を解説している授業風景をテレビで見たととき、聴講している学生の希望と可能性に満ちたまなざしがとても印象的であった。そのようなニュースを見聞きしていると、わが長大薬学部も捨てたものではないと変に自信を持ったりもしていた。

私が在学していた頃の教授陣も錚々たるメンバーであったと思われるが、私自身がそのすごさが解っていなかったと痛感している。今考えると、自分自身、短大とはいえ高等教育機関で教鞭を取っていることを考え合わせると、学生は先生方のすごさは解らないのかもしれない。そう思うと教育すること、また学生の可能性を引き出すことの難しさをひしひしと感じる。

実は、この原稿を頼まれた時、真っ先に浮かんだテーマが大学・短大の存在意義であった。なぜなら、自分が大学に在学していた当時、教育機関として「適切でない」大学が存在するなどとは考えていなかったからである。では現在はどうかというと、よほどのことがない限り、高等教育機関として「不適格」の烙印を押されることはないはずであるが、ややもすれば「不適格」に近い大学・短大が存在するようである。

実際に、平成14年に学校教育法が一部改正され、すべての大学・短大は自己点検評価を行い、さらに第三者の認証評価機関による評価を受け、適格認定を受けなければならないとされた。

注：学校教育法第109条 大学は、その教育研究水準の向上に資するため、文部科学大臣の定めるところにより、当該大学の教育及び研究、組織及び運営並びに施設及び設備（次項において「教育研究等」という。）の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。

2 大学は、前項の措置に加え、当該大学の教育研究等の総合的な状況について、政令で定める期間ごとに、文部科学大臣の認証を受けた者（以下「認証評価機関」という。）による評価（以下「認証評価」という。）を受けなければならない。ただし、認証評価機関が存在しない場合その他特別の事由

がある場合であって、文部科学大臣の定める措置を講じているときは、この限りでない。

私が勤める短大でも平成17年にいわゆる第三者評価を受け、無事に「適格」認定を受けることができた。この評価は事前に作成された「自己点検・評価報告書」に基づいて、10の評価領域に対し、それぞれ評価項目が3～5項目にわたって行われるものである。その領域とは、建学の精神・教育理念などに始まり、教育の内容、学生支援、研究、社会活動、財務など多岐にわたる。この平成17年の時にはALO（Accreditation Liaison Officer）として、自己点検・評価報告書の作成から、短期大学基準協会との連絡調整、評価員との連絡と非常に多忙であったことが思い出される。そのため、評価員の訪問調査が終わり、さらに適格認定が出たときには、正直このような役割はもうごめんだ、と思ったくらい力が抜けたことを思い出す。

ところが、今年もっと大変な役割が回ってきた。今度は、ほかの短大を評価する「評価員」の役割である。おかげで、この夏は評価対象校の自己点検・評価報告書を隅々まで読み、必要な関係資料を取り寄せるなど、評価のために久しぶりに頭を使い、真剣に取り組んだ気がした。おかげで、学生からは急に頭が薄くなったと指摘されたものである。

いずれにしても、このように私立のみならず、かつての国公立の大学・短大も第三者から評価を受ける時代となったわけであるが、普段の教育・研究活動は一般の人にはあまり目に付かないのも事実である。それぞれの大学・短大はその限られた人材や教育資材を用いて、普段から大学の存在意義を地域に発信しているのも、近年特に目につく現象である。そんな中でのノーベル賞の受賞は、大学の評価を一般の人に示す絶好の機会となった。これからの大学人は、自分の研究領域に引きこもるだけでなく、広く社会に貢献できることも、その大学の存在意義を示すことにならう。

とにかく、一地方大学出身者がノーベル賞を受賞したことはとてつもなくすばらしいことであるし、またそれを大いに誇りたいものである。

青春へのターン

松尾 泉 (昭46)

「月日は百代の過客にして、行き交う年もまた旅人なり」

これは、「奥の細道」の冒頭であります。過ぎ去って思うと本当に年月の経過は速いものです。おそらく、楽しい時間が多かったからでしょう。しかし、途中では幾たびもの艱難に遭遇し、現在の消滅を祈り、将来の存在をも信じ得なかった長い時間もありました。そして「金の卵」から「団塊の世代」へとひとからげにされた私たちも、いよいよ人生の転機に直面しております。

さて、遅くなりましたが、皆様におかれましては、お元気にしてお過ごしのことと拝察いたします。

かくいう私は、本年3月に長崎県を定年退職し、現在は医薬品卸に再就職しております。今回私が寄稿することとなりましたのは、同窓会学年理事の大西さんから依頼を受けたことからあります。聞き及ぶところでは、さんざん頼んだあげく受け手がなく、どうも最後が私であったようで「ファイナルアンサー」は「イエス」の回答のみしか準備されておませんでした。そういう事情でありますので、お見苦しいことと恐縮しておりますが、「この人、誰やったかな？」という程度でご覧いただければ幸いです。

定年が近づき「ライフプランセミナー」なるものを受講される機会がおりかと存じますが、一番強調されることは「趣味などの生きがい」と「マネープラン」であります。「マネー・マネージメントが趣味」というのもありますが…。今回は、その趣味を通しての近況報告をお話したいと思います。

私は十数年前、デジタルカメラの登場からカタログを見ているうちに（高価で購入できず）写真に興味を持つようになりました。デジタル化によって最後のプリントまで自分自身で作業できたことが大きな要因だと思っています。最初は、月刊誌を参考にして花などの静物を撮影しておりました。

5年ほど前、家内が近くの写真クラブに無断で

私を入会させたことから、渋々活動をしておりますが、実は、このクラブの会長が大学の先輩であります宮崎圭介先生（昭31）でした。先生は写真界では高名ですのでご存知の方も多いのではないのでしょうか。

写真はそれなりにおもしろいのですが、他のことへも良い波及がありました。

たとえば、ご承知のとおり、長崎には「おくんち」という大きな祭があります。撮影にはもってこいの被写体です。特に若い女性がいれば。最近、丸山の芸姑さんは若返り、そして毎年おくんちにも参加しています。「こ丸さん」や「花音（かおん）さん」（ツートップ）といった人気芸者のおっかけをしているうちに顔見知りとなり（ヨタヨタしていたのでおそらく同情したのではないのでしょうか）、終りには「花月」に足を向けることにもなりました。今年の正月は思いもかけず、「初弾き」（ごひいきを招待する芸者衆の踊り初め）にもお招きいただきました。この縁がさらに深まればと切望しておりますが、ストーカー行為と紙一重ではと「イエローカード」を差し出されていますので、いづれ新聞の片隅に掲載されるかもしれません。



一方、花の撮影も最初の頃は路傍の花のみが対象でしたが、写真誌などで紹介される山の植物にも惹かれ、主に近場ですが山登りも始めています。こちらはクラブを結成しました。会長（家内）、会員（私のみ）の2名体制で現在運営しております。「山で初日の出を」をモットーに10年ほど活動

しておりますが、未だ実現しておりません。(いつも会長の起床が遅れるため)

山登りのお陰で本当に美しく、可愛い花にも巡り合うことができました。麗人草(多良岳:長崎)、二輪草、ミツバツツジ(井原山:福岡)、ママコナ(英彦山:福岡)、アケボノツツジ(祖母山:大分)、フクジュソウ(仰烏帽子山:熊本)、カタクリ(寂地山:山口)など長々と続きそうです。さらに、九重の坊がつるは、そこにいてだけで青春の真っ只中にタイムスリップしたような錯覚に陥るほど魅力的です。

最近では十数キロを歩くのが通常ですが、さほど負担に感じなくなりました。少しばかり遠出するときは、0時出発、0時帰宅というハードスケジュールになることもあります。加えて、登山口への林道は狭い上に荒れた所が多く、専用四輪駆動車を使用していますが、崖っぷちを走ることもあり、会長をハラハラさせています。

また、昼食についてのハプニングも多く、2ℓの水を背負って折角登頂したのにバーナーを忘れていたり、持参した弁当をリュックから探し出せなかったりといったことなど度々あります。こんな時は残念ながら組織内での立場上、責められるのはいつも私でもあります。これも楽しみの一つになりました。(キモイとよく言われますが…)

今後は遊びの時間も増えそうですので、更に海外へも遠征しようと体力づくりに邁進しています。(と、言い切れる自信はありませんが)



話は変わりますが、長崎大学出身者にとって本年の大きな出来事の一つとしてほとんどの人が下村 脩先生のノーベル賞受賞を思い浮かべられるのではないのでしょうか。私自身とは全く関係の無いことではありますが、何かチョットばかり偉くなったように感じたのは「ワタシ ダケ?」。後輩である娘と祝杯を挙げました。

ところで、すでに案内が届いていることと思いますが、平成21年1月に長崎市で久しぶりの同窓会を計画しております。年初めの忙しい時期ではありますが、多くの方に参加していただければ幸いです。一応、こ丸と花音には伝えておきますが、会費が会費だけに期待されない方が無難かと…。家族、趣味などの楽しい話の玉手箱をお土産に多くの方が参加されますようお願いしております。

暖冬とはいえ向寒の初、お体をご自愛の上、一層のご活躍をお祈りします。

47年卒リレー報告

松本 逸郎(昭47)

昭和47年卒業生の皆様お元気でしょうか? 団塊の世代である私たちの同級生もそろそろ定年モードに入りつつある年齢になってしまいましたね。しかし、定年は間近に迫りつつあるものの、これからの長い長い人生の設計図はまだ引けていないのが実情ではないのでしょうか。私は、そろそろ頭を第二の人生モードに切り換える作業を進めないと、濡れ落ち葉症候群となりかねない恐怖に襲われている今日この頃です。『リレー報告』も今回4

回目を迎えました。今年は下村先生(昭26)のノーベル賞受賞で大いに沸いた我が同窓会でしたが、凡人の我々でも何かもらいたい。それが『人生の努力賞』なら猶よろしい。しかし、いただけるか否かはこれからの頑張りに懸かっているのではないかと感じている次第です。それでは西垣敏明さんの信州からの近況報告を『我が人生』に重ねさせてお楽しみください。

信州からの近況だより

西垣 敏明 (昭47)

改めて計算してみると長崎を去って36年、本年還暦を迎えました。昭和42年に入学しましたが、この年に製薬化学科が認可され、定員が倍増したため幸運にも入学できたひとりです。いわゆる学園紛争があった時代に昭和町と文教町のキャンパスで過ごし、また1年間放浪した結果1年遅れの卒業となりました。よって、同級生は160名と2倍の機会に恵まれています。その後の人生も幸運の連続で今日に至っているように思います。まさに感謝の人生です。

当時は無名の松本市の製薬会社から奨学金を頂き、お陰で昭和町界隈を毎晩飲み歩くことができ、松本では希望のプロパーではなく新薬の安全性部門に配置され、信州大学医学部病理学教室で学ぶ機会を得ました。現在も特別研究員として在籍させていただいています。松本の製薬会社には2年先輩の木下さん(昭44)が既に就職され、世界初の経口で効果を発揮する抗喘息薬化合物群を合成されており、この安全性評価を担当、上市後は副作用臨床材料を用いた研究にまで発展することが出来ました。16年余りの医薬品開発研究期間に非常に幸いなことに7~8品目の新薬開発や数百もの毒物質に遭遇する機会を得ました。信州大学から平成元年第1号の医学博士の学位を授与され、直ちに(勸食品薬品安全センター秦野研究所に移り、国際協力事業団(JICA)の専門家としてフィリピン保健省で約4年間の国際協力という貴重な経験もいたしました。不思議なものでJICA後も直ちに興味あるプロジェクトに参画でき、フィリピンにアジアで唯一の霊長類を用いた医薬品の安全性・薬理試験の受託研究センターを設立しました。計6年以上のフィリピンの経験は、誠に貴重で自己の能力の限界を再確認し、今後残された人生の目標がおぼろげながら浮かび上がってきました。

信州松本は、亡き小林五郎学部長が青春を過ごされた所で、先生には松本行きを大いに勧められた経緯があります。実際は日本一寒い地域でしたが、幸運にも4年後には松本美人に出会い、元氣

な子供二人も授かり、30歳過ぎには小さいながらも持ち家を安曇野に持ち、子供を自然の中で育てることができました。長女は英国でアロマセラピーを学び今は私の手助けを、長男は腎臓内科医として研修中です。生化学教室の恩師菊谷元資教授(昭15)には拙宅にお越しいただく機会がありましたが、指導教官の榮田和子博士(昭32)は安曇野をこよなく愛されていたものの機会なく、一昨年交通事故で御逝去されました(合掌)。榮田先生に与えられた課題が今話題のパラジクロロベンゼンでした。

4度の失業保険を享受して、平成12年二人の子供の名に因みM&Kラボラトリーズを設立し、熱帯地方の健康食品の研究開発、輸入販売を行い現在に至っています。商売向きの性格ではないにも拘らず倒産もせず、この2~3年は国税を納入しています。独立するまでは数名の同窓生を除き音信普通、というより接触を意図的に絶っていました。精神的に余裕がなかったことと、同窓生のみならずヒトとの付き合いが非常に苦手だったことによります。しかし、50歳を超えて青春時代の郷愁が甦り、6~7年前昭和47年卒業同窓会が台湾で開催されたことを機に心に変化が起きているように感じています。

8年前にノニジュースを日本に紹介しましたが、昭和42年入学同窓の中島憲一郎教授(昭46)にお願ひ、ノニ果実成分分析や抗酸化能の共同研究を快諾していただき、多くのノニ研究成果が得られました。更に、一昨年からは「赤い果実」ブアメラにも取り組んでいただき、インドネシア政府との2国間国際協力にまで発展してきています。共著本も出版できました。このカロテノイドに富むインドネシアのブアメラに関しては、特許に詳しい木下先輩のお知恵を頂き、インドネシアとM&Kの「物質移転協定」締結に至り(*写真)、本年「熱帯薬用植物研究会」を設立、中島教授室員の皆様にもご協力を頂いています。

恐らく信州には同窓生として木下先輩と小生し

かないでしょう。時折、一献交えながら私の愚痴を聞いていただき、適切な御教示を頂いています。いつまで経っても先輩と後輩です。嬉しいものです。

昭和47年卒同窓会が昨年12月に東京で開催され、30名弱が全国から参集しました。ほとんどが来年還暦を迎えることでしょう。後期高齢者年齢には程遠いが、気力・体力があるうちにという事で3年毎の同窓会を2年毎に開催することが決議され、次の名誉のある幹事役に指名されました。第三の故郷であるインドネシアのバリ島が次の同窓会会場所です。

下村 脩先生の本年度ノーベル化学賞および文化勲章受賞という朗報に接し、今更ながら長崎大学薬学部で学んだことを誇りに思い、学生時代より紆余曲折の人生ですが、残り20年の間に幾つか

の夢の一つを実現させたいと、上高地の麓まで降りてきた紅葉の信州で思案している今日です。



2007年7月、インドネシア産業省とM&Kとのブアメラ「物質移転協定」

48年卒クラス会の報告

森重 徹洋 (昭48)

卒後30年目のクラス会が5年前長崎の厚生年金会館で開催された際、次は山口でと決定されました。山口県には長薬出身者が150名位おられます。同期は桐木夫妻、金子夫妻、水谷（渡辺）さんと私の6名ですが、今回は世話役として山口市湯田温泉での開催を企画しました。なるべく多くの方に参加していただこうと思い、開催は6月7日の「山口市ホテル祭り」の日に設定し、次の日はオプションツアーを組み、1年前に開催予定の案内をしました。

当日は、一番遠くは仙台から仲子さんが、関東方面から大津、小松、多田、平田、渡辺さん、長崎から相川、井手、中島、高比良、中川、長谷川さん、その他九州から野尻、岡、菅藤、辻村、中山、肥後、埋金、本松さん、中国地方から宮重、津村、野本さんの参加で、28名（男性8名、女性20名）が湯田温泉の防長苑（教育員共済）で一次会を開催、その後タクシーに分乗し瑠璃光寺に移動、そこから一の坂川を歩いて下り、ホテル散策。例年より多いホテルの乱舞が見られ、皆感激でし

た。その後、全員で湯田のクラブへ！ひとつ後輩の今村君も参加してくれて、昔話やカラオケで大いに盛り上がりました。

翌日のオプションツアーでは、津和野・萩コース、秋芳洞・角島コース、山口市内観光コースの三つに分かれ、自家用車に分乗して県内の名所旧跡を巡りました。

今回のクラス会で感じたことは、皆が色々な分野で活躍しており、北京オリンピックでも女性の活躍が目立ったように、特に女性のパワーに圧倒されました。とてももうすぐ60歳とは思えないくらい生き生きとされてたことです。

5年後はどうなっているかわからないという意見が多く、次は3年後に博多で再会することを約束して、散会となりました。

追伸

この原稿を書いているとき、我々の先輩の下村脩先生がノーベル化学賞を受賞された報を聞き、感激しています。心からお慶び申し上げます。

和48年卒長崎大学薬学部同窓



平成20年6月7日 於 防長苑

後列 仲子 金子 大津 菅藤 中山 桐木 平田 辻村 長谷川
 (林) (藤村) (鶴原) (金築) (山縣) (富田) (許斐) (片山) (欽塚)

中段 桐木 高比良 岡 渡部 小松 中川 本松 野本 森重
 (横田) (長石) (木原) (田中) (山上) (寺田) (中西)

前列 金子 宮重 中嶋 野尻 相川 井手 津村 (山路) 肥後 (森)

甲子園観戦

橋本 覚 (昭52)

私達夫婦にとって数年前から、この時期、神戸に出かけるのが楽しみの一つになっています。娘が神戸に住むようになり彼女に会いに行くという目的で買い物や観光、また野球観戦を楽しんだりしているのです。昨年はUSJまで足を延ばしました。と言うのも、JRが山陰と関西往復のお得な乗車券(トクトク切符)を販売していることに気が付いたからで、今年は、往復一人12,000円の格安料金。勿論、駅には無料駐車場も割り当てられます。昨年はグリーン車を使ったのでこれも格安でした。これはJRの利用者が減少する時期に客を増やす方策なのでしょうか？

東京ドームでの3連戦に敗れ、ゲーム差なしで迎えた横浜戦(9月22日)。この甲子園チケットを入手したのはそのひと月ほど前のこと。昨年もこの時期、10連勝するタイガースを応援しました。確かあの時期もマジックが出たと記憶しています。

結局はその後、連敗し、3位になってしまいましたけど…、『だが、今年は違う。絶対に優勝する。優勝出来なかったら暴動が起きるんじゃないか?』と冗談を飛ばしていたのに…。チケット入手時、まさかこのような状況になるとは夢にも思わず…、それは、優勝が決まって、遠征から戻った選手たちを甲子園で迎え、歓喜の中、試合に酔えるものと思っていました。同行する奥様は目当ての『矢野は出ないのでは?』と心配していました。『連続出場がかかっている金本だけは絶対に出るし、いくら二日酔いでも矢野も顔だけは見せてくれるさ』と慰めていたほどです。

振り返ると、追いつかれてしまうという不安はあったのです。監督の岡田は在京の息子と酒を飲み交わすと言っていました。その前からコーチ陣はギクシャクしていたように思えたし、選手たちも強いと過信してか?必死さが欠けていたよう

な？そんな気が…胸騒ぎが…していました。それがこの試合で決定的に…、今岡が3番三塁で先発出場して真正面の当たりをトンネルしてしまったのです。それは1回表のこと。無気力なのか？ピクリとも動かなかったように見えました。そんなに強い当たりではなかったのにな？…。「またかよー！今岡！」後ろの席の少女が声を張り上げます。振り返るとその子の父親が満足そうに頷いています。父娘でタイガースについて毎日語り合っているのでしょうか？そんな雰囲気です。

手首への死球で守れなくなっていた関本、それが完全回復するまでの一時しのぎだと思っていたのに…。久しぶりに出てきて、ちょっと打点を稼いだとしても、『彼はベンチの中で浮いている』そう思っていました。『これでチームのまとまりが無くなってしまう。もう優勝は望めないだろう』と感じてしまいました。ここ数年、彼の守備は怠慢さが目にあまっていたし、走塁や打撃でも繋ぐ野球を無視しているように思っていました。

今年の快進撃は今岡が二軍落ちして関本が三塁を守るようになってからのことで…、実のところ、私は関本のファンなのです。

試合の流れは初先発したピッチャー石川が頑張っただけで切り抜け、その裏に1点、2回裏に2点と得点、リードを保ちます。1回のタイムリーは今岡でしたけど、2回の2点は関本が活躍したもので…、『さすが関本！』得点圏打率はチームで1番なのです。4回に横浜の吉村にホームラ



ンを打たれ、1点差。その後、アッチソン、藤川がリリーフして3-2で勝利。最後に、藤川が『あと1人』コールを3回も楽しませてくれましたが…、お陰で風船を飛ばしてしまって慌てて次を膨らませるおまけつきでした。観戦した収穫は関本がセンカンドに続きファーストを守るのを見られたこと。彼がファーストを守るのを初めて見ました。

当初は優勝した選手の勇姿が書けるものと期待していましたが、書き直すこと数回。結局、クライマックスシリーズでドラゴンズに破れ10月20日でシーズンが終わってしまいました。でも、今年のタイガースは長い喜びと深い悲しみを味わわせてくれました。可愛い可愛い駄目阪神ぶりを。来シーズンは真弓監督のもと今年以上に楽しませてくれることを期待しています。そして、私自身気で必ず応援に行くぞ!!

島原半島ツーデーマーチに参加し20km完歩しました！

山口 正弘 (昭56)

昭和56年卒の同窓生の皆さん、ご無沙汰しています。お元気でお過ごしでしょうか。私の方は、廃棄物行政の仕事7年目を迎え、不法投棄や不適正処理の対応などに追われています。また、家庭では、子供達のクラブの送迎や試合の応援など、子供中心の土日を送っています。10月12日には、子供が諫早レディースロードレースに参加した際に平坂さんとお会いしました。

さて、昨年の会報では、霧島縦走について寄稿しましたが、今年も日頃の運動不足を少しでも解消しようと、メタボ気味の体にむち打ち、5月には多良山系の経ヶ岳、8月末には久住山に登り、そして10月25日には島原半島ツーデーマーチ（第15回記念大会）に参加しました。今回は初めて参加した「島原半島ツーデーマーチ」の状況についてお伝えしたいと思います。

この「島原半島ツデーマーチ」に参加するきっかけは、8月に遡ります。昨年の霧島縦走をしたメンバーと同じようなメンバーで、今年8月30日に温泉旅行も兼ねて久住山へ登りました。その帰りの熊本県長州港で「島原半島ツデーマーチ」のパンフレットを目にし、参加してみようかという話になった訳です。

「島原半島ツデーマーチ」は、10月25日の雲仙市ステージと26日の島原市ステージの2日間開催され、私たちは1日目の雲仙市ステージに参加しました。雲仙市ステージには、5km、10km、20km、40kmの4コースが用意されていましたが、私たちは20kmコース（岳棚田と湧水を巡るコース）に参加することになり、当日は、小浜マリニパークに朝8時に集合し受付を済ませ、バスで出発地である雲仙市千々石町上岳地区に移動しました。雲仙市ステージの20kmコースには、全体で約300人の参加があったようで、私たちは男性6人、女性2人のメンバーで参加しました。

上岳地区の広場に集合し、体操を済ませた後、9時半頃出発し、一路、中間地点であり、チェックポイントでもある千々石海岸の福石公園を目指し出発。千々石町上岳地区は、棚田が山間に整然と配置され、昔ながらの原風景を思い浮かべる景色が広がっていました。また、雲仙山系から流れ出した清流が多くの水をたたえ、流れ下っており、その流れを利用した九州電力の小規模な水力発電所が何カ所か残っていました。周辺の田んぼは、既に稲刈りが済み、切り取られた稲の茎だけが残っており、棚田の石垣にはペコニアの花が咲いていて、きれいでした。

12時頃、チェックポイントである千々石海岸の



福石公園に到着。事前にコンビニで買っていたおにぎりで昼食を済ませ休憩した後、完歩を目指して12時半頃出発。残りの道のりは、小浜鉄道跡を橘湾沿いに進み、途中、小浜鉄道跡の3つのトンネルや緑のトンネルを通り、小浜町の木津、富津を通して、ゴールである小浜マリニパークに3時前に到着しました。



日頃の運動不足もあり、ゴール直前は腰が痛くなった次第です。しかし、当日は薄曇りの天気で気候もよく、リフレッシュができ、また、地元を再発見できた一日でした。

その後、雲仙に移動。その日は雲仙温泉街のホテルに泊まることになっていて、ゆっくりと温泉につかった後、酒を酌み交わしながら秋の夜長を楽しみました。

来年は、メンバーの一人が定年退職1年前の年を迎えることもあり、屋久島に登ろうという話が出ています。前回屋久島に行った時には雨に降られたこともあり、今度は晴れた時の宮之浦岳に登れることを夢めています。

最後に、3年後の平成23年には卒業30周年を迎

えますので記念の同窓会を長崎在住の人達と計画したいと考えております。昭和56年卒の皆さん、

ご協力とご参加をお願いします。

有吉敏彦名誉教授喜寿祝賀会

富田 守 (平2)

平成19年12月(金)、前衛生化学研究室教授 有吉敏彦名誉教授の喜寿を祝う会が開催されました(会報発行のタイミング上、1年近くも前のご報告になることをお許し下さい)。場所は長崎名物「角煮」で有名な長崎市銅座町の割烹「こじま」。今回の祝賀会は準備の不便もあって、長崎市内近郊にお住まいの方だけにご案内していましたが、大村や島原、そして五島からも駆けつけて頂き、総勢35名の門下生にお集まり頂きました。

有吉先生がご指導下さいました衛生化学研究室は、先生がご在職の時から毎年春には新しく研究室配属になった学生さんの歓迎会、年末には忘年会と年に2回もの同門会が開催されておりました。現役学生の飲み会に卒業生も参加するというか、卒業生の定例飲み会に現役学生を巻き込んでいたという感じでしょうか…老若男女を問わず、先生の温かいお人柄に大勢の教え子が自然と集まって

いました。そして、先生ご退官後の現在でも、ほぼ毎年のように忘・新年会シーズンに定例の同門会を開催しております。当時、薬学部4階で衛生化学研究室内隣の隣だった薬剤学研究室も「シバカリ会」を続けておられるようですが、毎年同門会を開催している研究室は、ほかにないのではないかと思います。この定例同門会は、卒業後、長崎県庁勤務の県職員、長崎市役所勤務の市職員、長崎大学医学部・歯学部附属病院や他の病院・薬局勤務の薬剤師、そして私が所属する県警本部科捜研職員の4つのグループが輪番の幹事を務めております。昨年(実は一昨年)、県警本部が幹事担当で、私たちは定例同門会を先生の喜寿祝賀会として開催することになりました。本来であれば、平成18年が先生の喜寿(数えの77歳)でありましたが、幹事が警察ということで、事件が多発し業務多忙のため1年遅れとなってしまいました。



平成19年12月7日 於 割烹こじま

さて、喜寿祝賀会は夕方6時30分から開始予定でしたので、5時45分の勤務時間終了と同時に万才町の県警本部庁舎を出て、猛ダッシュで銅座町の会場へ向かいました。有吉先生は昔から時間に厳格でいらしたので、長崎で生まれ育った教え子達も皆、長崎時間（予定時刻を10～15分遅れること）が通用する筈もなく、定例の同門会は開始10分前にはほぼ全員揃っているのが常でしたから、会場の準備もある私達幹事は、開始40分前の5時50分過ぎには会場に着きました。しかし、何とお店の玄関先で有吉先生と鉢合わせしてしまい、さらに、門下生の多くも（私から見れば大先輩ですが…）6時過ぎには集まって頂き、準備が間に合わないくらいでした。結局、門下生の皆様に準備を手伝って頂き、何とか無事に会を始めることができました。恐るべし有吉先生とその教え子達…と感じました。

有吉先生は、ご退官後十数年が経った今でも変わらず若々しく、薬学部ご在職時のまま時間が止まったかのように、着実に老けゆく教え子達との年齢の距離がぐっと近づいた感じがしました。今回集まった門下生は、昭和41年卒から平成8年卒まで幅広い年齢層の方々に、いつものメンバーの他、卒後初めてご参加頂いた方や家庭の主婦で夜の飲み会には普段なかなか出られない方など様々でした。中には薬剤師でありながら法科大学院に進学し、難関の司法試験に合格した卒業生もいて、有吉先生から驚きと喜びのご紹介がありま

した。

祝賀会では、有吉先生が一人ひとり門下生のところを廻ってお酌をして下さり、懐かしい昔話や近況報告で花が咲き、終始和やかでとても楽しい宴会となりました。この会報が皆様のお手元に届くころには、次の定例同門会が開催されているかもしれません。これからも毎年、有吉先生を囲んでの同門会がずっと続いていきますようお祈り致します。

なお、今回の出席者は次のとおりでした。

有吉敏彦名誉教授	矢野(河村)恵子(昭41)
井関(福川)淳子(昭41)	山中(林田)みちよ(昭43)
内田 民子(昭44)	中村(桑原)和子(昭44)
和泉 喬(昭45)	西村 敬一(昭47)
山内 茂樹(昭48)	栗原(吉武)早苗(昭50)
江口 正廣(昭50)	浦田美佐緒(昭53)
濱崎 和久(昭54)	荒木(高比良)寿子(昭55)
平坂 治子(昭56)	八田 章(昭56)
山口 正弘(昭56)	羽野(川越)円(昭58)
松本 秀樹(昭58)	津田(羽野)優子(昭59)
山口(村島)綾子(昭60)	江藤 和裕(院昭61)
小川 尚孝(昭62)	本多 雅幸(昭62)
山本 稔(平2)	富田 守(平2)
中村伸理子(平3)	橋本有以子(平4)
富田(宮崎)裕子(平4)	賀川慎一郎(平5)
佐藤(川崎)信香(平5)	織田堅一郎(平6)
土井(波多野)和子(平6)	土井 健志(平7)
南 義人(平7)	山下 慎一(平8)

合同同窓会だより

平良 文亨(平9) 福留 誠(平10) 今村 朋史(平11)

平成20年10月25日(土)に、平成9年、平成10年及び平成11年薬学部卒業生による合同同窓会を長崎市内のホテルで開催いたしました。平成9年卒業生にとりましては、卒後10年以上を経過し、初めての同窓会となりました。また、今回は平成10年および平成11年の卒業生のご協力により3学年合同の同窓会となりました。

開催にあたり、どの程度参加者が集まるのか不安でしたが、各発起人の努力(?)により68人(お

子さん、新婦、カメラマン等の全ての関係者を含む)と多くの参加をいただき、開催準備にも熱が入りました。

卒業後は、それぞれ日本国内はもとより、海外で生活されている方もおられるなど、なかなか一緒に会ってじっくりと語り合う機会がなかったように思いますが、当日は懐かしい面々が集まり、学生時代の思い出話や近況報告など多くを語らう場となりました(やった甲斐があったなあと、胸

を撫で下ろす発起人達でした)。

この同窓会では、参加者全員に会場のステージに上がっていただき、それぞれの近況報告をしていただきました。学生時代に思いを馳せながら、あるいは皆仕事や家庭生活をがんばっているんだなあと感じながらの楽しいステージでした。また、当日偶然にも？同窓会前に結婚披露宴を挙行了た平成9年卒業生の「青い稲妻」八木君が、とても美人な新婦康子さんと専属カメラマンの能勢君と嶺君を同行させ、一緒に参加されたことから、盛り上がりは最高潮に達しました。あつという間の時間でしたが、合同同窓会は大盛況のうちに無事終了することができました。その後、各学年毎に2次会、3次会(平成9年卒業生メンバーの一部は4次会)まで行い、昔話を肴に楽しいお酒とともに夜中まで楽しい時間を過ごしました。学生時代の友人は、かけがいのない貴重な存在であることを確認できたとともに、今後お互いに刺激し合いながら人生を送ることができれば幸せだなあと思っています。

皆さん、10年後はどうなっているのでしょうか？ 楽しみとAgingへの不安、それからAnti-agingとメタボ対策と忙しくなりますが、機会がありましたらその時の学年理事さん(私はもう3期目なのでしませんよ！パンチ君)や新婚の八木

君に企画していただければ大変嬉しく思います。(以上、ここまで平良筆→福留君へバトンパスします)

私にとって今回の3学年合同同窓会は、平良さん(平成9年卒学年理事)からの1通のe-mailから始まりました。4月の終わりごろ予期せず届いたこのメールは、今から考えると、大学を卒業してから10年もの歳月がすぎた事を告げる象徴的な意味を持っていたように思います。内容は、平成9年及び11年卒の平良さんと今村さんがどこかの席で意気投合し合同同窓会を企画したから、平成10年卒も一緒にやろうというものでした。ちょっと強引なお誘いではありましたが、私自身も学年理事として適当な時期に同窓会をと考えていた事もあり、渡りに船と思い合同同窓会への参加を決めました。

参加者がどれだけ集まるのかという不安もありましたが、最終的には60人を超える多数の同窓生と、そのお子さんなどが各地から訪れてくれました。同窓生達は、やはりそれなりに歳を取っていましたし、家族を持っている者も少なくありませんでしたが、同窓会では、学生時代に戻ったかのように語り合い、大いに盛り上がっていました。本当にこの同窓会の開催に関わられて良かったと思



長崎大学薬学部平成9年、平成10年及び平成11年生卒業生合同同窓会
平成20年10月25日 於 長崎ワシントンホテル



平成11年卒



平成9年卒



いました。

今回、お仕事の都合などにより同窓会に参加できなかった方や、連絡がどうしても取れなかった方も、各地で自分なりの人生を謳歌し、また、活躍していることと思います。今後とも長崎大学での学生時代を時々思い出していただき、気が向いたときには、同窓会にも顔を出していただけたら幸いです。きっと、楽しいお酒が飲めると思います（私は、楽しく飲みすぎて酷い二日酔いでしたが…）。次の同窓会にもきっと参加したいと思うような楽しい同窓会でした。参加者の皆様、本当にありがとうございました。（以上、福留筆）

平成11年の卒業生は幹事が連絡をするのが遅れたり、手を抜いてメールでお知らせを出したりしたので、残念ながら参加者が他の学年に比べて少なくなりました。同級生のみなさんにはこの場を借りてお詫びします。

それでも3学年合同ということもあり、かなりの人数が集まって同窓会は本当に大盛況でした。一番下の平成11年卒でもみんな三十路を迎え、話

す内容も年を取ったこと、子供のことなど学生時代では考えられないものばかりでした。気持ちだけは若いつもりでしたが、やっぱり卒業して約10年になるのでそうなりますね。でもみなさん良い意味で大人になったなあと感じました。

平成11年卒は少ないながらも二次会に行き、同級生のうわさ話をいっぱいしました。来なかった人、みんなにいっぱい話されていますよ(^_^)v

来年は卒業10周年を迎えます。またまた同窓会をするかもしれませんが、その時はぜひ参加してください。たぶんもう幹事はもうしていませんが勝手にしてほしいなあと思っています。

今回の合同同窓会は最下級生のくせに最上級生の平良さんに頼りっぱなしの同窓会でした。企画から当日の進行まで何から何まで全て任せてしまいました。こんな盛り上がったのも平良さんのおかげだと思っています。ありがとうございました。

長大の同窓生のみなさん、合同の同窓会はかなり盛り上がりますよ。他の学年でもぜひぜひ開催してみてください。（以上、今村でした。）

藤田教授定年退職記念祝賀会

福留 誠 (平10)

平成20年2月15日(金)に、藤田佳平衛教授の定年退職を記念する講演会(長崎大学薬学部多目的ホール)及び祝賀会(長崎市内のホテル)が開催されました。藤田先生は、昭和45年に京都大学大学院工学研究科を修了後、京都大学、九州大学、福山大学を経て平成2年に長崎大学薬学部教授として着任されました。本学においては、評議員及び教育研究議員を述べ8年間、薬学部長を2年間務められる等、大学運営において貢献されました。教育研究の面では、国内外の大学、企業等の研究者と交流し、多数の留学生を受け入れ、教育研究の国際化等に多に貢献されました。また、ホスト・ゲスト化学を発展させ、これらの成果によって日本薬学会奨励賞、シクロデキストリン学会賞を受賞されています。さらに、日本薬学会副会頭、年会組織委員長として長崎市で日本薬学会第123年会を主催されるなど、多方面において、長崎大学の発展に多大な貢献をされました。

記念講演会及び祝賀会は、芳本 忠先生を代表とする13名の教員(以下敬称略:植田弘師, 甲斐

雅亮, 黒田直敬, 河野 功, 河野通明, 小林信之, 塚元和弘, 中島憲一郎, 中嶋幹郎, 中村純三, 中山守雄, 畑山 範)を發起人とし、袁 徳其先生と私が準備作業を行ないました。祝賀会には齋藤寛 長崎大学学長をはじめ約100名の教員, 在学生, 卒業生が集まり、藤田先生の定年退職をお祝いしました。

祝賀会において藤田先生は、密教に関する興味深いお話をされました。人生をどのように過ごすのかということ、理系研究者であっても避けては通れないテーマです。祝賀会における藤田先生のお話からは、どう生きるべきかと常に問い続けてこられた藤田先生の姿勢が伝わってきました。また、同時に定年退職後をどのように生きるべきかと考え続けられていることも伝わってきました。藤田先生はまた、ご自分の定年退職後の過ごし方が、今後、定年を迎える方々の参考になればともおっしゃいました。私は、研究だけでなく、人生に対して常に哲学的であろうとする姿勢がまさに藤田先生らしいと感じました。



平成20年2月15日 於 ベストウエスタンプレミアホテル

現在、藤田先生は、体調を崩されて療養中とのことですが、しっかりと休養し体力が回復したら、私達が想像もしなかったような面白いことに取り組んでいかれるのではないかと期待しています。

いつも学生や周囲の人を楽しませることに心を砕かれてきた藤田先生の今後に期待しつつ、ひとまず筆を置きます。平成20年10月30日

同 期 会

大山 要 (平12)

平成20年8月2日、平成12年卒業生の同期会(飲み会?)が福岡にて開催されました。当初は藤本君の福岡への帰省に合わせて開かれる内輪の飲み会となる予定でしたが、幹事の林君から福岡近郊のものに声がかかり、当日は15名が参加しました。平成15年にも、卒業アルバムの完成を記念して同窓会を開きましたが、当時はまだ大学院で学業を続けているものもあり、話題の内容や雰囲気は学生の時とのギャップを感じませんでした。しかし、今回は全員が卒業後8年間でプライベートの様々な変化を経たせいか、自然と落ち着いた雰囲気

だったのが印象的でした。

さて、平成12年卒業同期生の皆様!!来年は福岡で盛大な同期会を開催することが決定しました。これは今回の飲み会の席上で、松永君(今回は所用で参加できませんでしたが…)が同期会の開催を熱望しているとの話があり、参加者全員がこれに大盛り上がりとなり決定しました。松永君!!同窓会誌上で発表しましたからね、幹事を宜しくお願いします。それでは、来年の同窓会誌を平成12年卒の同期会報告で賑わせることをお約束して、筆を置かせていただきます。

ぐびろが丘清掃活動

寺師 綾子 (学部4年)

8月3日、平成20年度ぐびろが丘下の慰霊碑の清掃が行われました。この清掃活動は、長崎大学薬学部OBの先生方、大学院生、学部生により、毎年8月に行われており、坂本キャンパスの熱帯医学研究所裏手にある慰霊碑およびその周辺を清

掃します。慰霊碑は、爆撃に備え長崎医科大学薬学専門部(長崎大学薬学部の前身)の教職員および学生で防空壕を掘る途中に原爆を受けて命を落とされた方々を偲び建立されたもので、裏には防空壕の跡が残っていました。

私は、今年初めてこの清掃活動に参加したのですが、2週間ほど前に医学部でも清掃が行われていたということもあり、例年に比べ生い茂った草木や落ち葉はきれいに取り除かれていました。慰霊碑の清掃後、犠牲者のご冥福を祈ってお参りし、当時の学生の憩いの場や原爆の爆風によって傾いた正門の跡を見せていただきました。憩いの場は今では穏やかな平和を感じるまでになっていましたが、正門は大きく傾いており爆風の凄まじさを目の当たりにし驚愕しました。

その後、田崎先生(昭22)から原爆投下時の話



を伺いました。原爆の体験談を直接耳にしたのは初めてで、一瞬にして被爆者の人生を変えたことに対し、原爆の恐ろしさ、悲惨さを感じました。

自宅に戻ってから、頂いた原爆体験記を読ませていただきましたが、内容はどれも想像を絶するものばかりでした。自身も被爆して負傷しているにも関わらず、負傷者や火傷を負った者を救助す

る姿。助けを求める悲痛な叫び。戦争を知らない今の私たちには考えられない地獄のような光景であっただろうと思いました。

今回、清掃活動に参加し戦争や原爆について考える機会を与えていただいたことを深く感謝しています。これからも多くの方々に参加していただき、原爆の苦しみを考えてほしいと思います。



九 薬 連 開 催 さ れ る

小森宏太郎（学部3年）

平成20年5月3日～5日の3日間の日程で、第51回九州薬学連盟体育大会が熊本大学で開催されました。

日頃のサークル活動の成果を発揮し、それぞれの競技で白熱した試合が繰り広げられ、長大はサッカー部が優勝、野球部は惜しくも準優勝でした。来年は九州保健福祉大学（宮崎）で開催の予定です。

結果をご紹介します。

野球部 準優勝

- ・ 第一試合 長崎大学 12－3 崇城大学
- ・ 準決勝 長崎大学 24－0 第一薬科大学
- ・ 決勝 長崎大学 3－9 熊本大学



野球部

サッカー部 優勝

- 一回戦 長崎大学 1 - 0 第一薬科大学
得点者：笹野
- 二回戦 長崎大学 1 - 0 熊本大学
得点者：追坂
- 三回戦 長崎大学 1 - 1 九州保健福祉大学
得点者：笹野
- 準決勝 長崎大学 2 - 1 福岡大学
得点者：国平, 永野
- 決勝 長崎大学 1 - 0 熊本大学
得点者：笹野



サッカー部

硬式テニス部男子 4位

- 予選 長崎大学 3 - 4 福岡大学
長崎大学 4 - 2 熊本大学

硬式テニス部女子 7位

- 長崎大学 2 - 5 福岡大学
- 長崎大学 0 - 4 第一薬科大学

男子バスケットボール部 準優勝

- 予選リーグ
長崎大学 81 - 61 第一薬科大学
長崎大学 64 - 81 福岡大学

• 決勝トーナメント

- 準決勝 長崎大学 88 - 40 崇城大学
- 決勝 長崎大学 55 - 62 熊本大学



男子バスケットボール部

女子バスケットボール部 4位

• 予選リーグ

- 長崎大学 47 - 23 九州保健福祉大学
- 長崎大学 41 - 74 福岡大学

• 決勝トーナメント

- 準決勝 長崎大学 46 - 56 崇城大学
- 3位決定戦 長崎大学 39 - 52 熊本大学

バドミントン部 3位



バドミントン部

旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃

伊藤 潔 (昭59)

今年度事業計画の一つの旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃の模様をお伝えします。

前日の15日はあいにくの雨で、天候が心配されましたが、朝から雨の方は問題なく、長崎を午前10時頃に出発した車中は日差しを浴び少々暑く感じるほどでした。前後しますが、

薬学部の柏葉会館前に集合した伊豫屋偉夫会長(昭41)、田崎和之先生(昭22)、監査の木下敏夫先生(昭35)、伊藤 潔会計幹事(昭59)、和田光弘編集幹事(平4)、岸川直哉庶務幹事(平10)と事務局の武次郁子氏の7名は2台の車に分乗して小



野島へと向いました。国道57号線を左折するときに、めずらしく偶然にも島鉄の電車に遭遇してしばらく待たされたあと、干拓の里の方へ向って走るとすぐに見覚えのある景色となりました。



10時半過ぎに到着すると、お隣の諫早干拓の里で何かイベントが開催されていたようで、駐車場が満車状態でしたが、運良く一番奥の、ちょうど記念碑の横に車を停めることができました。諫早在住の中村 博副会長(昭45)、高良真也幹事(昭57)らが既に清掃を始めようとしていましたが、お二人だけでなく、今年は小野島会のメンバーが田崎先生を含めて6名も駆けつけてくれております。諫早在住で学年理事の吉田研次先生(昭37)も長崎組とほぼ同時に現地に到着してくれたとこ



ろでした。

今回参加していただいた小野島会のメンバーは、田崎和之(昭22)、松本康裕(昭24)、峰 唯信(昭26)、立石正文(昭26)、岸川 良(昭25)、西川恭夫(昭26)の6名の先輩方です。西川先生は大分より、松本先生、岸川先生は福岡から駆けつけていただきました。ありがとうございました。



伊豫屋会長が宣伝して下さったお陰で、西日本新聞、長崎新聞、毎日新聞の記者が取材に来ていました。下村先生が学生時代を過ごされ、研究生生活へ入る第1歩ともなった地で、集まった当時の同級生や先輩諸氏から小野島校舎のことや下村先



生の学生時代の話などを熱心に尋ねているようでした。ちなみに、長崎新聞と西日本新聞の記事は確認できましたが、毎日新聞はわかりませんでした。



上の左の写真の手前左側のコンクリート部分が当時の校舎の正門とのことです。この日まで全く知りませんでした。右の写真は古川 淳名誉教授からお預かりした貴重な当時の校舎の写真で、同様に手前左側に門があり、薬学専門部の文字を読むことができます。



小野島会の先輩のお話の中で、「この辺が正門だった」というお話が耳に入り、尋ねてみたところ、記念碑の写真の手前にあるコンクリートが当時の門の跡であることを知り、よく見てみると錆びた鉄の蝶番もありました。さらに驚いたことには、武次さんがコピーしてこられた昔の写真には見事に当時の門が写っており、目の前のコンクリートが門であったことを初めて認識することができた日でありました。

清掃自体は、いつものように1時間ほどで終了し、残念ながら都合で昼食会を辞退された方たちを除いて、諫早市内の鰻屋へと移動しました。有名な鰻に舌鼓を打ちながら、小野島会の先輩方から一人一人当時の校舎や薬専のこと、下村 脩先

生のお話などを伺い、和やかで楽しいひとときを過ごすことができました。大変貴重なお話も聞くことができたのですが、いざこの記事を書こうとしてみると、記憶があいまいで大変申し訳ありません。別の機会に是非、詳しくお聞きし直して同窓生の皆さまにもお伝えできればと思います。

